

徳島大学国際センター

紀要

第6号

年報

第7号

2010年度

巻頭言

国際センター長 福井 清

国際センターとして平成20年12月に改組されました当センターは、徳島大学における国際戦略事業の実施推進本部であります。そのMissionは、徳島大学の国際交流事業を全学的な観点から推進し一元的に管理すること、徳島大学を拠点とするGlobal and Local Network of Excellenceを形成すること、日本人学生と留学生のグローバルで卓越した知の出会いの場を創出することにあります。新センター発足以来、学内のみならず、学外関係諸機関並びに地域の皆さまから多大なるご支援とご指導・ご鞭撻を頂いておりますこと、厚く御礼申し上げます。

徳島大学の学生を21世紀の世界をリードする国際競争力ある高度な人材として育成するためには、語学力の向上とくに発信型言語能力の強化が最重要であります。本年度は海外語学研修プログラムへの参加を積極的に推進するため、米国Southern Illinois大学の夏季英語研修とニュージーランドAuckland大学の春季英語研修を国際センターが主催する全学の語学研修プログラムとして実施致しました。産業界からは、ややもすると内向きであると評価される昨今の日本人学生の、内なる魂に宿る高い志とポテンシャルを世界に発信すべく、海外派遣プログラムの充実と開発はさらに積極的に推進して参りたいと考えております。

さらに今年度取組みました事業としましては、「徳島大学卒業留学生同窓会との連携強化事業」をあげることができます。これは、平成20年度の「徳島大学卒業留学生同窓会（中国）」、平成21年度の「徳島大学卒業留学生同窓会（韓国）」の設立に引き続き策定されたもので、同窓会からの推薦に基づいて入学する優秀な留学生に対する教育費免除制度、奨学金給付制度の導入を骨子とするものであります。その他、蔵本・常三島両キャンパスで実施されました「サマースクール・サマープログラム」、「アジア人財資金構想事業」、「国際交流サロン」など、様々な国際交流活動を実施致しました。今年度の活動の詳細に関しましては、本冊子「年報」の部に記載しておりますので参照頂ければ幸いに存じます。

なお、本冊子には、「年報」としての記載とともに、国際センター教員の研究成果も「紀要」として掲載しております。是非、ご一読頂き、各教員の研究成果に対しましてもご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

2011年3月

第一部

国際センター紀要

第6号

第一部 国際センター 紀要第6号

目次

アジア人財コースの自立化を目指した試行授業	1
－共通教育科目への取り込み－	
橋本 智（徳島大学国際センター）	
セルフ・コーチングに基づく自律英語学習支援に関する一考察	5
－大学生向け自律英語学習支援教材（Learning How to Learn）の概要－	
坂田 浩（徳島大学国際センター）	
福田 スティーブ（徳島大学共通教育センター）	
徳島大学留学生アンケート調査	12
－留学生の目的と経験の評価、今後の課題－	
竹内 光恵（徳島大学国際センター）	
日本語教育研究者の受け入れ	16
－そこから見えてきたもの－	
大石 寧子（徳島大学国際センター）	
美術作品を通じた学習の可能性	20
－共通教育日本語「日本人への提言」を通して－	
竹内 利夫（徳島県立近代美術館）	
Gehrtz 三隅 友子（徳島大学国際センター）	

アジア人財コースの自立化を目指した試行授業

ー共通教育科目への取り込みー

橋本 智

HASHIMOTO, Satoshi

徳島大学国際センター

要旨：アジア人財資金構想のコース終了に伴い、同コースの内容を共通教育の「日本事情」に取り込む試みを行った。大学にはアジア人財の自立化が求められており、教育部分は既存の授業に移行させる計画である。当初はアジア人財コースと同じ内容を行う予定だったが、学生の構成やニーズの違いで、より日本語と日本事情に中心を置く授業を行うことになった。今後は、単なる就活や就職に焦点をあてたものではなく、学生のニーズに合わせたものに作り替え、また日本学生も参加可能な魅力的で効果的な授業を考えていきたい。

キーワード：アジア人財、自立化、共通教育、就活

1. はじめに

経済産業省と文部科学省が平成19年度から開始したアジア人財資金構想高度実践留学生事業に、徳島大学は平成20年度より参加した。このプログラムでは徳島大学に在籍する外国人留学生を対象に、ビジネス日本語、日本ビジネス教育、インターンシップ・プログラム、就職支援などを行ってきた。平成22年度には本学2期生のコースが終わり、アジア人財事業自体も同年度で終了することになった。事業終了に伴い、アジア人財の参加組織・大学にはそれぞれ自立化が求められている。

徳島大学国際センターでは、アジア人財コースの終了にむけて、終了の一年前に当たる本年度に試行的に教育部分の自立化に向けた授業を行った。

2. これまでのアジア人財コースとの違い

2.1 アジア人財コース

本学アジア人財コースでは、大学・大学院に所属する外国人留学生に対して、教育面に関しては以下のような内容が扱われた。(1) 日本独特のものである就職活動の準備、(2) インターンシップのための準備と実際のインターンシップ体験、(3) 日本企業へ就職した後に必要な社会人としてのスキル、(4) これらを支えるための日本語能力の向上。(5) PBL (Project-Based-Learning) を用いたタスク型学習。学生のニーズや日本語能力などに合わせて、AOTSが作成したアジア人財のための配信教材、市販の書籍や教科書、また新聞記事などを使って授業をすすめた。

2.2 自立化に向けての授業

事業の自立化に向けて、教育面での方策はいくつか考えられた。これまでのアジア人財のような独立したコースを作ることも選択肢の一つだったが、予算の確保や単位化の難しさなどの理由で見送られた。それで、アジア人財の内容は共通教育の科目の一つである「日本事情Ⅰ」(前期)と「日本事情Ⅱ」(後期)に移行させ、学部生を中心に授業を行うことにした。

本来共通教育は学部1・2年生を対象にしているものだが、アジア人財の内容を考慮して、広く本学外国人留学生に開放し、将来日本の企業や海外の日系企業に就職を希望する学生を募った。ポスターを張り出したり、直接学生たちに受講を呼び掛けたりしたものの、結局アジア人財が本来ターゲットとしていた就職を目指す学部3~4年、修士1~2年の学生は集まらなかった。単位が出ない、あるいは必修ではない授業に学生を集めるためには、彼らにとって身近で魅力のある内容を提示する必要があると感じた。

3. 授業内容

3.1 「日本事情Ⅰ」の内容

アジア人財の内容を引き継ぎ、留学生の就職活動や就職後の仕事・生活をスムーズに行えることを目的に内容を組み立てた。授業開始当初は、前期の「日本事情Ⅰ」では主に就職活動のための指導、特に日本の就職活動の仕方、会社説明会への申し込み、履歴書の書き方、自己アピールの書き方を行う計画を立てた。加えて、これまで正規のアジア人財コースで行っていたように、日本の最新事情に触れながら日本の

社会を知り、同時に日々のニュースを気にかける習慣をつけさせるために、日経新聞の記事を読み、内容をまとめて話し、その中の語彙を覚えるという活動も行うことにした。

しかしながら、授業を開講してみると、前述したように通常の「日本事情」の受講生しか集まらなかった。前期では、学部1・2年生二人、研究生一人、学術協定校との交換留学生二人が受講生であった。学部生にしても就職活動は差し迫っておらず、研究生や交換留学生も日本での就職活動の必要を感じていない状況だった。

アジア人財の内容を共通教育に移して試行的に行ってみるとしても、学生の状況とニーズに合わない授業はできず大変戸惑った。最初の授業でこの点を学生たちと考慮してみると、彼らは差しあたって就職活動はしないものの、日本事情の一つとして学んでみたいということだった。また、就職活動や就職した後のことを題材にして留学生の日本語能力を引き上げることも十分にできるので、計画した内容を行うことにした。ただ、就職活動を実際にすぐに行う学生たちではないので、本来の「日本事情」に近い形で、日本のビジネスや社会に関する内容を取り込んだ形にした。

前期の「日本事情Ⅰ」で扱った内容は、以下のとおりである。

① 新聞の読み方

構成や文体について学習した。見出しの読み方を考え、見出しを文にしたり文を見出しに直したりする練習をした。

② 就職活動の流れ（時期、就活の語彙）

就活の具体的な流れを説明した。エントリーシートや自己PRといった言葉を紹介し、日本での就活の仕方を整理した。

③ エントリーの仕方

ウェブエントリーの方法やセミナー・説明会への出席について考えた。

④ 採用情報の集め方

どのように採用情報を読み取るかを、具体例を見ながら学習した。「手取り」「社員持ち株制度」「フレックスタイム」などの語彙の学習も行った。

⑤ 会社説明会への申し込み・資料請求

会社説明会に申し込む練習をした。会社説明会の資料請求をメールとする場面と、説明会の申し込みを電話とする場面を扱った。申し込みの流れを確認した後、電話とメールのマナーや使うべき敬語を学習し、会社説明会の申し込みのロールプレイなどを行った。また、予約の変更をお願いする場面

も練習した。

⑥ 電子メールでの依頼の仕方

⑦ 社会人基礎力

経産省が提唱している、就職するために必要な能力である「社会人基礎力」を取り上げた。各項目の意味と実際の社会での必要性を考え、自分はどのくらい社会人基礎力（主体性、計画力、発信力など12項目）を持っているかを自己評価した。そこから自己分析を始めた。

⑧ 自己表現活動

自分の長所と短所（足りない点、改めようと思っている点）を、具体的なエピソードと共に書いた。

「行動カード」を使って自分を振り返る活動をし、加えて自分の性格や傾向を表す表現を学習しそれを記述した。短所を長所に変える記述方法も検討した。

⑨ エントリーシートの記入

自己分析をもとに、エントリーシートを書いた。ここでは、学習者の目指す業界や企業の具体的なイメージはないので、一般的な自己分析をした。また、外国人としての強みをどう表現できるかも考えた。

⑩ 履歴書の記入

履歴書と送付状、封書のあて名を実際に書いた。また、書き言葉の敬語を確認した。

⑪ ビジネスマナーの基本

会社での自己紹介を練習し、社内外での様々な挨拶やお辞儀について学んだ。また、相槌など日本人との適切な会話の仕方を考えた。

⑫ 業界研究

日本の業界や大・中小企業について、また業界に関する語彙を学習した。業界研究の必要性とその方法も学んだ。

⑬ 日経新聞の精読と語彙テスト

毎回日経新聞から、ビジネスに関する最新の記事を精読し、そこから読み取れる日本のビジネスについてクラスで考慮した。また、その中で扱った語彙の漢字と意味を、次の授業の最初の小テストで確認した。

3.2 「日本事情Ⅱ」の内容

前期ではエントリーシートや履歴書の記入など、就活に必要な「書き」の学習を主に行ったので、後期は就活時の面接の練習を中心に行う計画を立てた。しかし、受講の学生のニーズはそこにはないことが分かった。前期受講した学部生二人は引き続き受講したものの、協定校と

の交換留学生と研究生は入れ替わり、新たな交換留学生が六人と研究生が二人加わった。つまり、これら新しく「日本事情Ⅱ」を履修する学生は前期で学習したことを全く知らないわけで、自己分析などもしておらず、後期に予定していた「面接」の練習をすることは不可能であった。

そこで、前期の復習を簡単にしつつ、日本での就活・就職を学生の日本語レベルの向上と日本文化の理解を進めるためのトピックとして使うような方向に大きく転換することにした。二人の学部生からは、引き続き就活を中心に扱ってほしい、面接の練習もしてみたいと言う声もあったが、二人とも就活はまだ数年先であり、日本語レベルの向上も必要な状態であったので、今回はこのような内容で進めることにした。

後期の「日本事情Ⅱ」の内容を以下に記述する。

- ① 社会人としての自己紹介の仕方
学生としてではなく、職場での自己紹介の練習をした。
- ② 就職活動の理解
前期の内容を復習し、日本の就活の流れや語彙などを学習した。
- ③ ビジネスマナー
なぜビジネスマナーが必要なのかを考えた。そのあと、実際のビジネスマナーのいくつか（会社訪問、名刺交換、席次など）を考慮した。
- ④ 敬語
最初になぜビジネス場面で敬語を使う必要があるのかを考えた。それからビジネス会話での敬語を練習した。
「クッション言葉」を学び、スムーズなコミュニケーションの仕方について考えた。また、メールのやり取りの際に使われる敬語も学習した。
- ⑤ アポイントメントの取り方
ビジネスの相手とのアポイントメントの取り方をロールプレイ形式で練習した。
- ⑥ ビジネスメールの書き方
件名や挨拶文の書き方など、ビジネス場面の特徴を意識しながら書く練習をした。
- ⑦ 社会人基礎力
社会人基礎力を概観し、とくにチームワークの重要性について考えた。
- ⑧ 企業・業界研究
履修者は特定の企業や業界に関心があるわけではないので、一般的な業界について概観し、就活の際にどのように調べていくの

か、なぜそのことが必要なのかを考えた。また、本学で外国人留学生のための就活セミナーが計画され、いくつかの企業の人事担当者が話をされることになっていたもので、受講生をグループに分けて、その企業の研究をさせた。それをスライドにまとめ、クラスで発表をしてもらった。

- ⑨ 仕事と家族
日本人の思考や行動を理解するため、コースの最後の部分では「家族」に焦点を当てたトピックを扱った。将来同僚となるかもしれない日本人の関心事、悩みなどを考慮し、実際の日本人のライフスタイルを理解できるように授業を進めた。
AOTSの配信教材に載せられている、家族を話題にした川柳や「現代日本人のライフスタイル」の統計を読んだりした。
- ⑩ 「新入カトレニング」
『一歩先に行く!!新入カトレニング』（池谷聡）から、入社後に求められる新入社員としての気遣いや行動に関する部分を抜粋し、学生と一緒に日本の会社で求められるものについて考えた。例えば、「課長から数日前にされた指示を忘れてしまった。どうしたらいいか」といった状況で、「再度伺ってもよろしいでしょうか」と謙虚な姿勢と言葉遣いで依頼すべきだといったことを考えた。これは、毎回授業の初めの10分程度を使って行った。
- ⑪ 日経新聞の精読と語彙テスト
前期と同様、毎回日経新聞の記事を精読し、内容と語彙の把握をした。また、前回扱った記事からの小テストも行った。

4. アンケート

4.1 就職に対するアンケート

後期の最後に、受講生に対して日本での就職に関するアンケートを行った。

- ① 「将来日本の企業に就職したいですか」
「はい」二人、「いいえ」一人、「分からない」四人
「はい」と答えた理由は、日本語をずっと勉強しているから、給料が高いからというものだった。「いいえ」の理由は、形式が堅苦しいから。「分からない」の理由は、日本の企業に限らない、就職が難しいといったものであった。
- ② 「将来、自分の国や外国にある日本の企業に就職したいですか」
「はい」四人、「いいえ」三人

「はい」の理由は、就職後もっと日本のことを勉強したい、日本の企業の雰囲気を経験したい、日本語を生かしたいといったものがあつた。「いいえ」の理由は、日本の企業に限らない、日本のビジネス文化が難しいそうだとといったものであつた。

- ③ 「将来、日本の企業でない会社に勤めても、日本と関係のある部署で働きたいと思いませんか」

「はい」五人、「いいえ」一人、「わからない」一人

「はい」の理由は、日本語を勉強しているからが多かつた。「いいえ」の理由は、日本企業で実際に働きたいから、というものであつた。

4.2 考察

七人という少ない回答ではあつたが、受講生はほぼ日本国内外の日本企業で働きたいという意欲があることが分かつた。特に、自国に戻ってから日系企業に努めたいと考えている様子も分かる。自分たちが学んできた日本語や体験した日本文化に関する知識を、将来どこかで役立てたいという思いが表れている。

日本のビジネスに関して、どんなことを知りたいか聞いたところ、外国人の採用の具体的な例を聞きたい、日本の会社のシステムや日本のビジネスマナーをもっと知りたいという声があつた。このアンケートから、学生たちは就活の具体的な方法についてよりも、日本のビジネスに関する全般的なことを知りたいという意見が強いことが分かつた。

5. まとめ

アジア人財コースの自立化に向けて、教育の部分では共通教育の「日本事情」にアジア人財の内容を移して、本年度試行的に授業を行った。結果として分かつたことは、当然のことではあるが対象学生が大きく異なるため、同じような内容を扱うことは難しいということである。就活を目指す学生に受講してほしいと思つているが、学部生・院生ともに卒業・修了が近づくについて専門の勉強が忙しくなり、単位に必要な授業への参加は困難になるだろう。それで、現時点で既存の共通教育の「日本事情」にアジア人財の内容を取り込むのであれば、目標を単に就活や就職後のため、とするのではなく、それらをトピックとして日本語能力の向上を目指す、あるいは日本事情の一部として日本の文化や社会を知る、といったものにし

ていき、そのための教材や教授内容を選択する必要があるだろう。

一方で、外国人留学生が日本企業、日系企業に就職する数はこれから増加していくだろう。また、企業のグローバル化が叫ばれてはいても、日本人と一緒にチームとなって働くために必要な素質を備える外国人が求められる状況に変化はないだろうし、出口教育として大学でもその分野の教育を行っていく必要もあるだろう。そのためには、これまでアジア人財で扱われてきた内容の教育は引き続き行われるべきだと考える。そのために、共通教育での授業を学生がより魅力的で効果的なものと感じるものにしていきたい。

こういった観点から、もう一度「ビジネス日本語」の内容を再考することも必要だと考える。学生はビジネス場面での具体的な日本語の表現や敬語、マナーなどを学びたいと考えているが、それだけでなくもっと本質的なもの、日本人との違和感のないコミュニケーションの仕方自体を学ぶよう助ける必要があるだろう。それは、マナーや敬語などの裏側にある、日本人のものの考え方、好き嫌い、思考スタイルなどである。外国人学生に対して「日本人になる」ように、日本人に同化するように教育するのではなく、日本人の発する言葉や振る舞いの背後にある考え方や好き嫌いを理解し、日本人と友好な関係を築けるよう学生を助けていくことが大切だと考える。学生がそのことをしっかり理解すれば、自ずと必要とされる適切な日本語の表現や振る舞い方などができるようになるだろう。このような概念が「ビジネス日本語」教育に含められるような形を作っていきたいし、それを授業の中でも実践していきたい。

加えて、日本人学生にとつても、アジア人財で扱われた内容は十分必要なもので、さらにグローバル化が進む現在、外国人との関わりを学ぶ必要もあり、このような共通教育の授業に日本人学生を取り込むことも検討すべきだと考える。

参考資料

- 池谷聡『一步先行く!!新入カトレーニング』2009, TAC 出版
高橋伸子『幸せの値段』1998, 青樹社
AOTS『仕事と家族プロジェクト』アジア人財資金構想配信教材

セルフ・コーチングに基づく自律英語学習支援に関する一考察 —大学生向け自律英語学習支援教材 (Learning How to Learn) の概要—

坂田 浩

SAKATA, Hiroshi

福田 スティーブ

FUKUDA, Steve

要旨：本稿では、日本人大学生の自律学習を支援するために作成された「Learning How to Learn」(試作版)の紹介を行う。

日本人が実用的な英語力を身につけるには、約2,000時間から5,000時間という長期間にわたる教育が必要と言われている。しかしながら、現状の日本における英語教育で学習者に提供されている教育時間数を見る限り、中学校から大学までの総教育時間数が736.4時間(Benesse教育研究開発センター, 2008b)という報告もあり、決して十分なものとは言えない状況にある。加えて、不足分を補うだけの授業外学習が形成されているとも考えにくいことから、今後は、一人一人が自律した学習者として自らの英語学習を構築し、学習を継続できるように支援する必要がある。今回は、その支援を具体的な形で提供するために試作した教材(ワークシート)について紹介する。

キーワード：自律学習、英語教育、自己調整学習、セルフ・コーチング

1. はじめに

本稿は、筆者らが展開している自律英語学習支援を主眼とした授業実践の核となる理論について、「自己調整学習」ならびに「セルフ・コーチング」という2つのキーワードを基に解説すると共に、現在、大学生向けに開発中のワークシート「Learning How to Learn」の概要について紹介するものである。

2. 本授業実践の概要

2.1 本授業実践の背景

・長期間にわたる自律英語学習の必要性

通常、日本人英語学習者が真に実用的な英語力を獲得するには2,000時間から5,000時間という長期間にわたる教育が必要と言われている(中島, 2006)が、中学校入学時から卒業時までの英語授業に充てられる総時間数が約736.4時間(Benesse教育研究開発センター, 2008b)となっていることを見れば、現実には最低限必要とされる授業時間の約半分にも達していないことが見て取れる。

必然的に、授業で確保できない1,000時間以上の学習時間は、学習者が授業外で独自に確保していく必要があるわけであるが、小学生では3割弱、中学2年生では6割強、高校2年生では8割近くが家庭学習を「ほとんどしない」と答えていることを見れば(久富, 2005)、授業外での英語学習も殆ど行われていないものと推測される。事実、中・高・大学生の授業外英語学習時間(塾や家庭学習を含む)を見てみると(Benesse教育研究開発センター, 2008a)、

中学生の約68%、高校生の約73%が英語学習を日常的に「ほとんどしない」もしくは「30分程度」と答えており、大学生に至っては、徳島大学の場合、約80%が「定期的な英語学習を行っていない」と答えていることから(徳島大学, 2008)、授業外における英語学習は殆どされていないものと考えられる。

ここで問題としている約1,000時間以上におよぶ「授業外における英語学習時間」についてもう少し考えてみると、その基となる2,000時間という数値が教師などによる指導や授業(つまり、他者からの指導に基づく学習 Guided Learning)を想定しているものであることから、学習者個人が独自に行う学習とは効率性の点で全く異なるものと考えられる。特に、「分からないところがあればすぐに質問することができる」、「間違いなどの訂正をその場でしてもらえる」などの点で指導に基づく学習(Guided Learning)の方が効率的であることを考えれば、学習者個人が独自に英語学習を展開する場合には、おそらくは上記に示した2倍程度の時間(つまり、約2,000時間)をかける必要があるのかもしれない。

日本人が英語を身につけるのに必要な学習時間には諸説あり、約380時間の学習時間で最低限必要な外国語能力を身につけることができる(Council of Europe, 1992)とするものから数年に及ぶものまで様々である。しかしながら、「中学校から大学まで英語の授業を受けてきたけど、全く英語が使えない」といった英語教育に対する批判なども総合して考えると、

最終的には、英語は日本人にとって難しい外国語の一つであり、日本人が英語を身につけるには相当の時間をかけて学習を継続していく必要があることは確かなようである。

・自律的な学習者の育成

次に、日本人学習者が授業内外で行う英語学習内容およびその手法について見てみると、ほとんどが教師による指導を中心とした他律的学習であり、例えば「学習者自らが学習プランを設計し、自らの手で英語学習を展開していく」といった自律的なものとなっていないのが現状のようである。

例えば、高校生の家庭における英語学習を調査した結果（Benesse 教育研究開発センター，2008a）を見ると、高校生の42.5%が「宿題と次の授業の予習を行う」、23.3%が「宿題と試験前の学習のみを行う」、10.6%が「試験前の学習のみを行う」と答えており、実に全体の76.4%が家庭での英語学習時に授業の予習や宿題、定期試験のための勉強を行っていることが分かる。

予習、宿題、テストは、教室と授業外学習を接続し、円環的学習（竹内，2007，Spring）を実践するための手法の一つであり、学習者が教室で学んだことを授業外で再確認し、発展的に学習を進めていくことを可能にすると考えられることから、それ自体何か問題であるということは全く無い。むしろ、中・高生が授業の予習や宿題、定期試験対策を中心に家庭学習を展開していくことは至極当然のことであり、取り立てて問題であるとは考えられない。しかしながら、授業の予習、宿題、定期試験対策のいずれにしても、「教師が主導する形で英語学習が展開されている」点ではさほど大差はなく、本授業実践において重視している長期間にわたる英語学習に必要な自律性を育成するという点においては課題が残るものであり、長期的な視点からみれば学習者の自律的な学習を育成することが必要であると考えられる。

特に、大学入学後、更には大学卒業後も視野に入れた長期にわたる英語学習を考えてみた場合、学習者が常に誰かの指導・助言を得ながら学習を継続できることは想定しにくく、むしろ、学習者自らが自律した学習者として学習上の課題に取り組んでいくことが求められることの方が多いと考えられる。例えば、大学入学後の学習について考えてみた場合、最初の約2年間は教養科目として英語の授業を受講することも可能だが、基本的にはそれ以降は自らの専

門分野に関する学習に集中することになるために、英語学習に十分な時間とエネルギーをかけることは難しくなると思われるが、最終的に英語学習を継続したいと思うのであれば、「どのようにして専門と英語学習を両立するか」について自分で考え、具体的な対応策を自らの力で見つけ出す必要があるのである。また、このことは大学卒業後についても同じであり、就職してからも継続して英語学習を続けるのであれば、「どのようにして仕事と英語学習を両立するか」について自ら考えていかなければならないのである。

このように、最終的には、学習者自らが学習目標を設定し、情報を収集し、計画を立て、その計画に沿って学習を展開し、必要に応じて学習計画や目標を評価・修正するといった継続的な自律的学習が重要な役割を担う（坂田 福田，2010）ことは明らかであり、自律的英語学習を実践するための基盤を提供することが、大学における英語教育の大きな役割の一つであると考えられるのである。

2.2 本授業実践の理論的背景

今回取り上げる授業実践は、筆者らがT大学の教養英語科目（「基盤英語」1年生もしくは2年生対象）で約1年前から実践しているものである。同授業では、先にも述べたように、「学習者が自律英語学習を実践するための基盤（特に、学習方法の検討ならびに学習計画の策定）を提供すること」を目的として授業を展開しており、具体的には以下に述べる自己調整学習（Self-Regulatory Learning）とセルフ・コーチングという2つの考えに基づいて授業の構成を行っている。

・自己調整学習について

伊藤（2008）が述べるように、自己調整学習は、「自ら学ぶ力」（＝自律学習）に直結するものであり、「学習者が目標を達成するための一連の能動的な学習プロセスであり、学習者が常に自分の状態を積極的にモニタリングし、コントロールし、評価するプロセス」（畑野，2010，p. 63）を意味するものである。

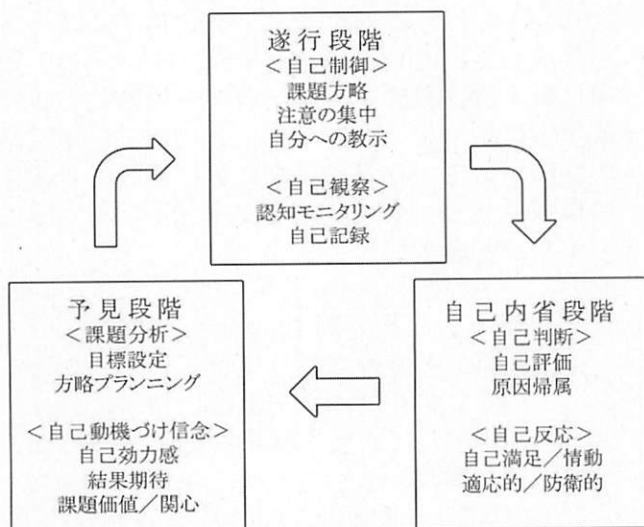
この一連のプロセスは、

- ・ 学習目標を設定する段階（予見段階）
- ・ 学習行動を行う段階（遂行段階）
- ・ 学習行動を評価する段階（自己内省段階）

によって構成されており（図1）、予見段階で目

標とそれを達成する方法・方略についての見通しを立て、遂行段階でそのプランを具体的な形で実行すると共に進捗状況などに関するモニタリングを行い、続く自己内省段階において評価・反省を行い、目標や方法・方略の修正などを行うように構成されている。

図1：自己調整学習プロセス



(畑野, 2010, p. 64)

自己調整学習理論は、学習者を「自らの学習行動を調整・コントロールする潜在性を持つ者」として能動的な視点から見つめ直し、これまでに蓄積された学習研究、認知心理学、動機づけ研究の知見を統合する枠組みを提示した点で多くの分野に大きな影響を与えている。事実、予見段階、遂行段階、自己内省段階というこれら3つの段階は、人材育成などでよく言われるPDCA (Plan-Do-See-Check) サイクルと似ている部分が多く、ビジネストレーニング、それに本稿で扱う授業実践の基となっているセルフ・コーチングにも大きな影響を与えており、その適用範囲の広さを伺い知ることが出来る。

・セルフ・コーチングについて

コーチングとは、「目標やテーマを設定しそれを実現する過程で、クライアントとコーチが会話を重ね、その双方向のコミュニケーションを通じて課題を解決していく」(伊藤, 2002, p. 35)ことであり、具体的には、コーチとの対話を通して得られる「気づき」が問題解決の原動力になるとされている。

コーチングを理解する際によく引き合いに出されるのがティーチングであるが、一見すると混同しやすいように見えても、実は両者はお互いに一線を画すものである。

ティーチングでは、問題や課題に対する答えは基本的に「指導者側にある」という考えが前提として存在し、教える側(指導者)が示す解決策や対処法に従うことが当然のこととして期待されるが、コーチングでは問題や課題に対する答えは基本的に「相手の中にある」という想定が前提として存在することから、コーチは何かしらの指示・助言を提示したり、解決策を示したりするようなことはしない。あくまでも「支援者」として相手の話しにじっくり耳を傾け、質問することで、相手が自分の目標や目標を達成するための手段などに「気づく」ための手助けを行うのである

ここで、コーチングのプロセスを見てみると、一般的には図2に示すような、

- ・ 将来像をイメージ
- ・ 目標の設定
- ・ 行動計画の立案
- ・ 行動の実践
- ・ 評価と修正

という5つのステップに分けられていることが多いが、セルフ・コーチングにおいても同様のステップが採用されており(本間, 2006)、双方共に先に提示した自己調整学習プロセスと共通する部分が多い。先に示した自己調整学習プロセスを基に整理してみた結果を表1に示すことにする。

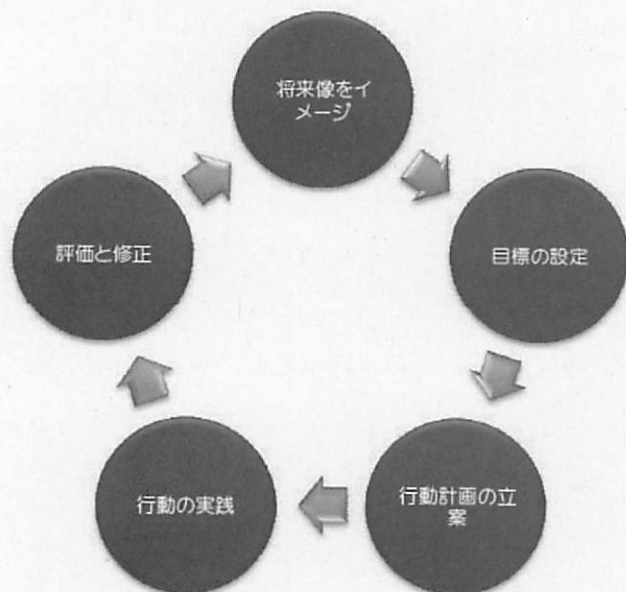
表1：自己調整学習とセルフ・コーチング

予見段階	・ 将来像をイメージ ・ 目標の設定 ・ 行動計画の立案
遂行段階	・ 行動の実践
自己内省段階	・ 評価と修正

今回取り上げる授業実践では、クライアント(つまり学習者)自らがコーチの役割を担うセルフ・コーチングを基に授業設計を行っているが、その理由としては、

- (1) 卒業後までも含めた長期的な視点から英語学習支援を見た場合、誰かからの助言・支援を常に期待できるとは限らないため、セルフ・コーチングなどの自己調整学習を通して自力で学習を設計・管理することが必要である

図2：コーチング・プロセス



(2) セルフ・コーチングでは、コーチとの直接的な対話を通して得られる気づきが期待できないため、ワークシートに記載された質問事項やエクササイズなどに答えることで自らの気づきを促すが、このワークシートが本授業内での学習設計活動と授業外での英語学習を円環的につなぐカギになると期待できる

という2点を挙げるができる。特に、本授業においては「学習者が自律英語学習を実践するための基盤（特に、学習方法の検討ならびに学習計画の策定）を提供すること」を目的としていることを考えれば、(2)に挙げた「授業内での学習設計支援活動と授業外での英語学習を円環的につなぐ」ことが重要であり、その円環の中心となる支援教材が非常に大きな意味を持つと考えられる。

そこで、次項では本授業実践のために作成した英語自律学習支援ワークシート「Learning How to Learn」の概要について述べることにする。

3. Learning How to Learn の概要

3.1 自律学習に向けた3ステップ

先にも述べたように、現在の高校生は教師の指導を基盤とした他律的学習により学習を展開しており、その学習に対する他律性は大学に入学してからも急には変わらないと考えられる。このような学習者に対し、「さあ、これからは自分の力で勉強していくことが大事なんだから、自分で計画を立てて勉強してください」

と指示したとしても、一部の学習者はやる気を持って積極的に進めていこうが、不確実な出来事に不安を感じる多くの日本人学習者は、その場でたじろいでしまい、なかなか先に進めない状況に陥ってしまうと考えられる（ホフステッド、2000）。

本授業実践では、このような学習者に対応できるように、Guided Autonomy Syllabus (Fukuda, 2010) と呼ばれる考えに基づき全体のシラバスを作成した。Guided Autonomy Syllabus は、簡単に言えば「教師主導の学習から段階的に自律的学習に切り替えていく」ことであり、本授業実践においては以下の3期に分けることで全体の構成を行っている（各期の概要については、以下の説明を参照）。

- ・「導入期」（教師側 100%）
教師が主導権を握り学習者の学習を導く時期であり、本授業実践においては自律英語学習に必要な知識を導入する時期とした。
- ・「指導期」（教師側 50%、学習者側 50%）
自律学習に必要な知識を学習者が教師の指導の下で試していく時期であり、本授業実践では、導入期で学んだ内容を基にしながら教師と共に学習計画を立案・実行・修正する時期とした。
- ・「実践期」（学習者 100%）
実際に試したことで得られた知見を基に学習者が主体となり学習を進めていく時期であり、本授業実践では各学習者が自らの手で英語学習を進めていき、最終的な振り返りを行う時期とした。

3.2 Learning How to Learn の概要

今回試作した支援教材「Learning How to Learn」は、「学習者が自律英語学習を実践するための基盤（特に、学習方法の検討ならびに学習計画の策定）を提供すること」を目的として作成されており、大学教養教育における英語授業（週1回×15週）で利用しやすいように、計15セッションで構成されている。各セッションのタイトルは以下の表2に示すとおりである。

全体の構成としては、表2中の期別にも示しているように、計15回の授業を3つに分割し、それぞれ5回ずつを「導入期」、「指導期」、「実践期」としてワークシートの作成を行っている。各期に割り当てられているセッションの概要は以下の通りである。セッション1は、全体のオリエンテーションに相当するため、解説から

は除外している。

表2：セッション一覧表

No	タイトル	自己調整学習プロセス			期別
		予見段階	遂行段階	自己内省段階	
1	Introduction	本授業のオリエンテーション			
2	Learning Project for Future U	○	--	--	導入期
3	Building Learning Plan (1)	○	△	--	
4	Building Learning Plan (2)	○	△	--	
5	Assessment & Self-Management	--	--	○	
6	Weekly Exercise 01	○	○	○	指導期
7	Weekly Exercise 02	○	○	○	
8	Weekly Exercise 03	○	○	○	
9	Weekly Exercise 04	○	○	○	
10	Reflection & In-class Presentation (1)	--	--	○	
11	Weekly Exercise 05	○	○	○	実践期
12	Weekly Exercise 05	○	○	○	
13	Weekly Exercise 05	○	○	○	
14	Reflection & In-class Presentation (2)	--	--	○	
15	Self-evaluation & Reflection	--	--	○	

○：セッション中で主に扱う自己調整学習プロセス
 △：セッション中で二次的に扱う自己調整学習プロセス
 --：セッション中で扱わない自己調整学習プロセス

・導入期

まず、導入期（セッション 2-5）では、教師の指導の下で自律的英語学習に必要な知識を導入することを主たる目的としていることから、

- ・ 目標設定と学習計画の立案方法（予見段階）
- ・ 学習状況のモニタリングに関する方法（遂行段階）
- ・ 自己評価とやる気の継続方法（自己内省段階）

という3点に関するワークを中心にセッションを構成している。

また、セッション 3、4 で学習計画を立案する際には、セッション 6 以降に予定している指導期に向けて学習者がよりスムーズに自律学習を実施（遂行段階）できるように、ワークを構成している。

・指導期

続く、指導期（セッション 6-10）では、導入期で学んだ自律英語学習に必要な知識を基に教師と共に学習計画を立案・実行・修正することを目的としていることから、

- ・ 各週の学習目標と計画の設定（予見段階）
- ・ 計画に基づく学習の実施（遂行段階）
- ・ 実施した学習の評価および学習計画の修正（自己内省段階）

のすべてを行うようにワークシートを構成している。なお、セッション 10 で「振り返りとクラス内での発表」（Reflection & In-class Presentation）を行うようにしているが、これは、ともすれば個人的な活動になりがちな自律学習に「他の学習者との共同的学び」を取り入

れることで、これまで気づけなかった学習方法などを学習者間で共有してもらうためである。

・指導期

最後の実践期（セッション 11-15）では、学習者が自ら自らの手で英語学習を進めていき、最終的な振り返りを行うことを目的としていることから、基本的には指導期と同じな内容でワークシートの構成を行っている。

なお、セッション 14、15 で「振り返りとクラス内での発表」（Reflection & In-class Presentation）および「自己評価と振り返り」（Self-evaluation & Reflection）を行うようにしているが、これは本授業全体の振り返りを通して、授業終了後の自律英語学習について考えてもらうためである。

4. まとめ

本稿では、（1）長期的視点から英語学習を捉えなおし、最終的には自律した学習者の育成に取り組む必要があることを指摘し、（2）学習者の自律英語学習を支援するための方法論について、自己調整学習ならびにセルフ・コーチングという2つのキーワードを基に検討を行うと共に、（3）本授業実践のために試作した教材「Learning How to Learn」の概要について解説を行った。

今後の方針としては、まず現行の試作版について検討を継続し、早急にバージョンアップを行うようにしたいと考えている。今回は、試作版であったことから内容に関する詳細は解説しなかったが、次稿において詳細なる解説を行いたいと考えている。

また、今後完成版を作成するためにも、学期終了後の授業効果を測定することが求められるため、まずはデータを収集し、学期単位での結果をまとめるようにしたいと考えている。将来的には長期的な視点から見た授業効果も測定する必要があると思われるが、まずは学期単位での結果をまとめてから調査を開始するようになりたいと考えている。

【参考文献】

- Benesse 教育研究開発センター. (2008a). 参照日: 2011年3月4日, 参照先: 東アジア高校英語教育 GTEC 調査 2006: http://benesse.jp/berd/center/open/report/eastasia_gtec/hon/hon1_2.html
- Benesse 教育研究開発センター. (2008b). 調査データクリップ! 子どもと教育. Retrieved 125, 2010, from 英語教育～第1回～: <http://benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0014/clip0014a.pdf>
- Council of Europe. (1992). *Threshold Level 1990*. Council of Europe
- Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2009). *Motivation, Language Identities and the L2 Self*. NY: Multilingual Matters.
- Eriksen, B., & Strommer, D. (1991). *Teaching College Freshmen*. San Francisco: Jossey Bass.
- Fukuda, Steve. (2010). *The Guided-Autonomy Syllabus in EFL Contexts*. Germany: VDM Verlag.
- ホフステード G. (2000). 多文化社会：違いを学び共存への道を探る. (岩井紀子, 岩井八郎, 訳) 東京: 有斐閣.
- 伊藤守. (2002). *コーチングマネジメント*. 東京: ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 伊藤崇達. (2008). 「自ら学ぶ力」を育てる方略－自己調整学習の観点から－. BREED(13), 14-18.
- 久富義久. (2005). 学力調査を読み解く. In 義久富, & 孝. 田中, *希望をつむぐ学力* (pp. 137-164). 明石書店.
- 坂田浩, 福田スティーブ. (2010). 大学英語教育における Task-Based Instruction (TBI) の可能性と限界：学習方略形成と自己調整学習を目指した授業に関する一考察. 徳島大学国際センター紀要(5), 15-21.
- 竹内理. (2007, Spring). 自ら学ぶ姿勢を身につけるには - 自主学习の必要性とその方法を探る-. TEACHING ENGLISH NOW, 2-5.
- 中島和子. (2006). 母語以外の言葉を子どもが学ぶ意義：バイリンガル教育からの視点. BERD, 18-22.
- 徳島大学. (2008). ラーニングライフ-第1回学生の学習に関する実態調査報告書-. 徳島

大学.

畑野快. (2010). 自己調整学習の有効性と検討課題及び大学教育への導入についての一考察. *京都大学高等教育研究* (16), 61-72.

文部科学省. (2010年8月5日). 平成22年度学校基本調査の速報について. 参照日: 2011年3月4日, 参照先: 報道発表:

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/08/17/1296403_1_1.pdf

本間正人. (2006). 「セルフコーチング入門」. 東京: 日本経済新聞社.

徳島大学留学生アンケート調査

－留学生の目的と経験の評価、今後の課題－

竹内光恵

TAKEUCHI, Mitsue

徳島大学国際センター

要旨：徳島大学国際センターが担う留学生リクルート支援活動をより効果的に行うために必要な知見を得るため、留学生アンケートを実施した。徳島大学に在籍する外国人留学生の徳島大学留学に至る経緯や留学経験の感想について調査した。調査結果をもとに、留学生が徳島大学に何を期待し、どのように評価しているかを明らかにし、どのような情報発信が効果的であるかを考察する。

1. はじめに

日本政府が2008年に発表した「留学生30万人計画」は、2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指すものである。徳島大学では、この政策に基づいた留学生受入れの推進を図っており、国際センターには留学生獲得につながる交流支援や広報活動等が求められている。

効果的な留学生リクルートを行うためには、留学生が徳島大学に何を期待し、どのように評価しているかを知り、明確な指針を示すことが必要である。また、留学志願者がどのような情報源を利用しているかを知り、効果的な情報提供を行うことは留学生リクルートの重要な課題である(Printz, 2009)。徳島大学では学生の生活実態調査を近年定期的に行っているが(例：徳島大学2006, 2009)、留学生のみを対象とした調査は「平成14年度留学生生活実態調査」(徳島大学留学生課, 2003)以降行われていない。

そこで、外国人留学生の本学入学に至る経緯や入学後の意識を検討することにより、所属や入学動機や情報利用などの特徴や傾向を把握し、今後の戦略的な留学生リクルート及び海外協定校の新規開拓の参考となる基本的な知見を得ることを目的として調査を行った。

2. 実施方法

2.1. 調査対象

平成22年3月に開催された「第6回国際展開推進シンポジウム」及び「留学生交流懇談会」に会場した本学在学中の外国人留学生を対象とした。

2.2. 調査手段

調査票を用いたアンケート形式で調査を行い、調査票は日本語版と英語版を用意した。調査票では、本学が過去に行った平成14年度留学生時実態調査(徳島大学留学生課, 2003)及

び東京工業大学の2002年留学生満足度調査アンケート(東京工業大学, 2003)を参考にし、下記の項目について質問を行った。回答形式は、年齢の記入などの例外を除き、選択式とした。また、調査票の回答は無記名とした。

2.2.1 留学生自身について

留学生自身については、以下の質問をした。

- ①属性(性別、年齢、出身国・地域、本学の所属課程・学部)
- ②日本滞在期間
- ③在学期間
- ④学費出資者及び奨学金の受給

2.2.2 日本留学について

- ①第一希望の留学先：日本が第一希望であったか、また日本が第一希望ではなかった場合、どこが第一希望であったかを質問した。
- ②日本留学の目的・理由：徳島大学における過去の7項目(徳島大学留学生課, 2003)から新規となる3項目を加えた10項目(「学位取得のため」、「高度な科学・技術を学ぶため」、「家族・先生・知人の薦め」等)について、5件法ライカート尺(1.まったく違う～5.まったくその通り)を用いて質問した。
- ③来日前の日本語学習：来日前の日本語学習経験の有無、日本語学習期間、利用した日本語学習施設について質問した。

2.2.3 徳島大学留学について

- ①第一志望の大学：徳島大学が第一志望であったか、また徳島大学が第一志望ではなかった場合、どこが第一志望であったかを質問した。
- ②徳島大学留学の目的・理由：徳島大学における過去の6項目(徳島大学留学生課, 2003)

に東京工業大学の調査（東京工業大学, 2003）から新規となる5項目を加えた11項目（「入りたい学科や研究室がある」、「母国の先生・知人・友人の薦め」、「出身大学との協定」等）について、5件法ライカート尺（1.まったく違う～5.まったくその通り）を用いて質問した。

③徳島大学留学に関する情報源：徳島大学への留学に関する情報を得る際に利用した情報源10項目（徳島大学ホームページ、徳島大学のパンフレット、友人・知人からの情報等）の利用頻度を5件法ライカート尺（1.まったく利用しなかった～5.非常によく利用した）を用いて質問した。

④徳島大学留学に関する評価と満足度：東京工業大学が行った留学の感想に関する項目（東京工業大学, 2003）を利用した8項目（「徳島大学に来てよかった」、「教官が十分に指導してくれる」、「できれば他の大学へ移りたい」等）を5件法ライカート尺（1.まったくそう思わない～5.非常にそう思う）を用いて質問した。

⑤徳島大学留学終了後の予定と希望：徳島大学での留学終了後の予定（帰国、日本に滞在する等）及び将来希望する職種（教員、研究者、会社員等）を過去の調査（徳島大学留学生課, 2003）にもとづいて質問した。

2.3. 調査手順

調査票は徳島大学在学中の留学生が参加した「第6回国際展開推進シンポジウム」及び「留学生交流懇談会」の受付で合計118部を配布した。配布時に日本語版と英語版のどちらかを選択してもらった。調査票の回収は会場出入りに回収箱を6つ設置して行った。全体での調査票回収率は約69%であったが、シンポジウム参加者からの回収率は90%以上（日本語版95%、英語版92%）と高かった。本調査の結果は回収できた81名の回答に基づくものである。表1は各会場での配布数と回収率を示している。

表1. 調査票の配布数と回収率

	合計	シンポジウム		交流懇談会	
		日本語	英語	日本語	英語
配布数	118	21	12	36	49
回収数	81	20	11	26	24
回収率(%)	68.6	95.2	91.7	72.2	49.0

3. 調査結果

3.1. 回答者の主な特徴

表2に回答者の主な特徴を示している。回答者の性別では男性の割合が多かった（男性60%、

女性40%）。また、回答者の半数以上（67%）が中国人留学生であり、回答者の9割以上がアジア地域出身であった。所属過程では、大学院が約8割と多く、回答者の過半数が博士課程後期の留学生だった（52%）。所属学部は工学部が60%と過半数を占めていた。学費及び奨学金に関しては、回答者の7割近くが私費留学生であり、また回答者の約8割が奨学金及び授業料の免除を受けていた。

表2. 回答者の主な特徴

	人数 (%)	平均値 (標準偏差、範囲)
性別 (女性)	27 (40.3)	
年齢 (歳)		27.86 (4.08, 21-40)
出身地域		
中華人民共和国	45 (67.2)	
その他の東アジア ^a	8 (11.9)	
東南アジア ^b	8 (11.9)	
南アジア ^c	2 (3.0)	
オセアニア及び環太平洋諸島	2 (3.0)	
中南米	2 (3.0)	
来日してからの期間 (月)		25.16 (23.46, 3-108)
徳島大学在学期間 (月)		23.25 (21.27, 3-108)
短期留学 (はい)	13 (19.7)	
所属課程		
博士課程後期(博士課程)	35 (51.5)	
博士課程前期(修士課程)	18 (26.5)	
大学院研究生	2 (2.9)	
学部生	5 (7.4)	
学部研究生	4 (5.9)	
日本語コース	4 (5.9)	
所属学部		
工学	40 (59.7)	
総合科学	7 (10.4)	
医学	10 (14.9)	
歯学	4 (6.0)	
薬学	3 (4.5)	
その他 (日本語コース等)	3 (4.5)	
主な学費出資者		
家族又は自分	47 (69.1)	
日本政府	17 (25.0)	
母国政府	2 (2.9)	
その他外国政府	2 (2.9)	
受給中の奨学金 (有り)	55 (79.7)	
授業料免除		
全額免除	30 (46.2)	
半額免除	24 (36.9)	
免除を受けていない	11 (16.9)	

^aモンゴル、大韓民国、台湾を含む地域。

^bベトナム、マレーシア、インドネシア、カンボジア、ラオス、ミャンマー、フィリピンを含む地域。

^cバングラデシュ、ブータンを含む地域。

3.2. 日本留学について

回答者の79%（50名）は、日本が第一希望の留学先だったと答えた。日本が第一希望でなかった場合の第一希望国・地域では、多い順に米国（8名）、オーストラリア（2名）、欧米（1名）が挙げられた。

表3は、日本への留学を決定した理由・目的

の平均値を示している。ここでは、「学位取得のため」、「高度な科学・技術を学ぶため」、「日本は経済と技術が発展した国なので」が平均値4.0以上と高い数値を示した。これらのうち、「学位取得のため」と「高度な科学・技術を学ぶため」は半数以上（順に56%、52%）が「まったくその通り」と回答した。「日本企業への就職」と「母国以外の国での就職」については、「まったく違う」又は「ほぼ違う」とした回答者が半数以上であった（順に53%、58%）。

表3. 日本留学の目的・理由

	平均値 (標準偏差、範囲)
学位取得のため	4.14 (1.23, 1-5)
奨学金獲得のため	2.83 (1.63, 1-5)
日本留学の奨学金を得たため	2.75 (1.63, 1-5)
高度な科学・技術を学ぶため	4.27 (1.02, 1-5)
日本の経済と技術の発展	4.05 (1.07, 1-5)
日本文化への興味	3.75 (1.14, 1-5)
日本企業への就職	2.50 (1.39, 1-5)
母国以外の国での就職	2.52 (1.24, 1-5)
家族・先生・知人の薦め	3.33 (1.54, 1-5)
異国や異文化での生活経験	3.92 (1.07, 1-5)

来日前の日本語学習についての回答では、日本五学習経験の有無は「ある」と「ない」が半数ずつ（それぞれ36名）であった。来日前の日本語学習経験がある回答者のうち、日本語学校と大学の授業の利用が顕著であった（順に19名、16名；複数回答）。来日前の平均日本語学習期間は19.31か月間（標準偏差：23.46；範囲1-111か月間）であり、半数近くの49%が学習期間は一年未満と回答した。

3.3. 徳島大学留学について

徳島大学が第一志望であったとの回答は77%（48名）であった。徳島大学が第一志望ではなかった場合、第一志望とした日本国内の大学は、多い順に①京都大学（4名）、②東京大学（2名）、③大阪大学、鳴門教育大学、金沢大学（各1名）であった。

表4は徳島大学選択の目的・理由への回答の平均値を示している。徳島大学への留学を決めた要因として、学びたい学科や研究室の存在（平均値：3.92）と教育及び研究環境の適性（平均値：順に3.79、3.63）が主な理由であった。また、母国の先生や友人等の勧めも、留学先の大学を決定する際に重要な要素であった（平均値：3.93）。

徳島大学留学に関する情報源の利用で「非常によく利用した」の回答が最も多かったのは、徳島大学ホームページ以外のインターネット情報（24%）であった。回答者の半数以上が「非

常によく利用した」又は「よく利用した」とした情報源は、割合の多い順に、①友人・知人（56%）、②徳島大学教官からの情報（54%）、③徳島大学ホームページ以外のインターネット（52%）であった。情報源の利用頻度の平均値は、表5で示している。

表4. 徳島大学選択の目的・理由

	平均値 (標準偏差、範囲)
入りたい学科や研究室がある	3.92 (1.07, 1-5)
教育環境が最適	3.79 (.99, 1-5)
研究環境が最適	3.63 (1.10, 1-5)
生活環境が最適	3.50 (1.04, 1-5)
母国の先生・知人・友人の薦め	3.93 (1.23, 1-5)
日本政府(文科省)による配置	2.74 (1.45, 1-5)
母国政府による配置	2.03 (1.25, 1-5)
出身大学との協定	2.98 (1.74, 1-5)
徳島大学に知人・友人がいる	3.04 (1.53, 1-5)
徳島で就職するため	1.60 (1.01, 1-5)
他の大学・機関に入れなかったため	1.95 (1.41, 1-5)

表5. 徳島大学に関する情報源の利用頻度

	平均値 (標準偏差、範囲)
徳島大学ホームページ	3.42 (.99, 1-5)
徳島大学ホームページ以外のインターネット情報	3.60 (1.06, 1-5)
徳島大学のパンフレット	3.05 (1.03, 1-5)
日本での徳島大学説明会	2.72 (1.28, 1-5)
母国での日本留学フェア	2.57 (1.19, 1-5)
徳島大学教官からの情報	3.41 (1.24, 1-5)
母国の出身大学教職員からの情報	2.82 (1.30, 1-5)
友人・知人からの情報	3.58 (1.05, 1-5)
日本大使館・領事館からの情報	2.40 (1.05, 1-5)
学会の国際会議での情報	2.71 (1.28, 1-5)

徳島大学における留学経験の評価と満足度では、回答者の80%以上が「来て良かった」、「将来役立つ知識や技能を習得した」、「良い先生と友人に恵まれている」、「指導教官が十分に指導してくれている」、「留学生へのサービスは十分だ」、「徳島大学留学に満足している」の項目に対し、「非常にそう思う」又は「そう思う」と回答した。しかし、「出来れば他の大学へ移りたい」に対し、30%以上が「非常にそう思う」（5%）又は「そう思う」（27%）と回答していた。表6に徳島大学留学の評価と満足度の平均値を示す。

表6. 徳島大学留学の評価と満足度

	平均値 (標準偏差、範囲)
来てよかった	4.36 (.71, 2-5)
将来役に立つ知識や技能を習得した	4.41 (.69, 2-5)
良い先生と友人に恵まれている	4.45 (.75, 1-5)
指導教官が十分に指導してくれる	4.37 (.81, 1-5)
留学生へのサービスは十分だ	4.14 (.91, 1-5)
他の人にも勧めたい	4.09 (.89, 1-5)
出来れば他の大学へ移りたい	2.63 (1.29, 1-5)
徳島大学留学に満足している	4.22 (.75, 2-5)

最後に、表7に徳島大学留学終了後の予定と

希望の回答分布を示す。徳島大学での留学を終えた後の予定として、過半数が「母国へ帰る」(56%)と回答した。また、希望職種では、教員と答えた回答者が最も多かった(32%)。

表 7. 徳島大学留学終了後の予定と希望

	人数 (%)
留学終了後の予定	
帰国する	33 (55.9)
日本に滞在する	17 (28.8)
母国以外の外国へ行く	5 (8.5)
わからない	4 (6.8)
将来希望する職種	
教員	19 (32.2)
研究員	15 (25.4)
会社員	13 (22.0)
留学前の職場に戻る	5 (8.5)
学位取得のために就学を続ける	4 (6.8)
その他の職業	2 (3.4)
就職の計画はない	1 (1.7)

4. 考察

本調査の回答者の特徴では、本学に在籍する留学生の統計(徳島大学、2010)と類似する傾向が見られた。例えば、本学では、留学生に男性の占める割合が多い傾向や、中国人留学生が過半数を占め、全体の9割近くがアジア地域出身者からなる傾向がある。また、所属では大学院及び工学部を中心とした構成となっている。しかし、本調査の対象は便宜的抽出によるものであり、本学留学生の母集団を適切に代表しない可能性もあることに留意する必要がある。

日本留学の目的と理由では、高度な科学と技術を学ぶことや学位取得が強く表れていた。同時に、日本の高度な技術や経済発展、日本文化への興味も日本を留学先として選ぶ際の重要な事柄であったと考えられる。逆に、日本企業や母国以外の国での就職は、日本留学の目的として低く位置づけられる傾向があった。留学終了後の予定として過半数が「帰国する」と回答していることから、回答者の多くが日本で習得した高度な科学・技術を母国で生かしたいと考えていると考察できる。

また、回答者の8割近くが日本を第一希望の留学先としていたが、来日前に日本語学習経験があったとした回答者は半数であり、その多くの学習歴は1年未満であった。これらの結果から、来日後の日本語学習機会の充実は、日本留学を希望する留学生にとって重要な要素であるといえる。

徳島大学を選択した目的や理由の回答から、決定要因には学びたい学科や研究室の存在、学術環境、先生や知人の薦めが非常に重要であることが分かった。また、留学に関する情報源の

利用では、大学のホームページやパンフレットなどの公式情報のほか、学外ウェブサイトや友人・知人からの情報が非常に頻りに利用されていたことが分かった。

さらに、本調査では、徳島大学での留学経験と満足度は高い傾向を示した。しかし、「出来れば他の大学へ移りたい」と感じている回答者が約3割いたことから、その原因を明らかにし、このように感じている留学生の低減に取り組む必要があると思われる。

5. 今後に向けて

徳島大学の国際化に向けた活動において、留学生の獲得と維持は重要な要素の一つである。優秀な留学生獲得には、各カリキュラムや研究分野の国際的評価を高めるなどの世界へ向けたアピールや留学生同窓会等の卒業生ネットワークを活用したリクルート活動が重要な課題となるであろう。また、留学生向けの大学公式ホームページを充実させることも重要であるが、大学公式ホームページ情報の利用率よりも、その他のウェブサイトや知人・友人等から得られる情報の利用率が高かったことから、これらの情報源の重要性を考慮して情報を発信していく必要がある。さらに、来日後の日本語学習機会を充実させることは、日本文化に興味のある海外の学生や母国で十分な日本語学習機会を得られない多くの日本留学志願者にとって魅力的な要素となるだろう。

【参考文献】

- Printz, P. J. (2009). Advertising: What, where, and when to say it. In Linda Heaney (Ed.), *NAFSA's Guide to International Student Recruitment* (pp.67-74). NAFSA: Washington, D.C.
- 徳島大学 (2006). キャンパスライフ: 第1回大学院生生活実態調査報告書. 徳島大学.
- 徳島大学 (2009). キャンパスライフ: 第2回大学院生生活実態調査報告書. 徳島大学.
- 徳島大学 (2010). 徳島大学概要 2010. 徳島大学.
- 徳島大学留学生課 (2003). 平成14年度留学生生活実態調査報告書. 徳島大学留学生課.
- 東京工業大学 (2003). 2002年留学生満足度調査アンケート報告書. 東京工業大学国際室国際企画掛.

日本語教育研究者の受け入れ

—そこから見えてきたもの—

大石 寧子

OISHI, Yasuko

徳島大学国際センター

要旨：2010年度前半国際センターは中国からの日本語教育に携わる研究員をはじめて迎え入れた。約6ヶ月の研究・研修を振り返ると共にそこから見えてきたいくつかの課題について考察したい。

キーワード：日本語教育、日本語教育研究者、運用力

1. はじめに

留学生センター（現国際センター）は2002年4月に徳島大学に設置され、翌2005年より徳島大学での全ての日本語教育が留学生センターで始まった。その後2008年に発展的改組により国際センター（以下センターとする）となった。今日までの歩みの中で今年度はじめて海外から日本語教員の研究員を受け入れた。受け入れに際し、組織上の問題や研究及び研修環境・中国における日本語教育指導法等課題がいくつか残った。今後のためにそれらについて検証、考察をしたい。

2. 受け入れに関して

2.1 受け入れまでの流れ

2009年8月のはじめ、中国から1通のメールが届いた。河南省理工大学外国学院日本語学部に席を置く若い日本語教員から、「JBIC（国際協力銀行）円借款日本研修」の奨学金を得て徳島大学で6ヶ月研究をしたいという申し出であった。筆者の論文を読んだの申し出で「運用に繋げる日本語教育」をテーマにしたいと言うことであった。

センターの現在の立場からセンターでの受け入れは、難しい。ただサブテーマとして、本国で業務と並行して北京師範大学大学院修士課程で「作文指導」の研究をしており、来日後は、日本語そのものの研究とその研究のための資料も得たいということであった。そこで総合科学部の日本語学の先生方に協力を仰ぎ、連携で指導に当たることにした。従って受け入れは総合科学部にお願いし、なんとか本研究員の受け入れが実現した。

2.2 受け入れプログラム

受け入れにあたり、いくつかの柱を立てることにした。①研究テーマの一つである「日本語」

に関する知識や資料の獲得②運用に繋げる外国語としての日本語教育の授業計画及び授業展開・クラス運営の習得③運用に繋げる視点での授業実習である。また日本語教育が行われている組織・環境を知るため徳島大学及び国際センターについての理解を促した。

2.2.1 オリエンテーション

徳島大学での実際の受け入れは、2010年2月26日より8月17日の約6ヶ月であった。

研究・研修に先立って、まずセンター教員及び事務方によるオリエンテーションを行った。内容は、①国際課職員による徳島大学及び国際センター概要②日本語教員による i 日本語研修コース及びアジア人財コース ii 全学日本語コース iii 共通教育及び総合科学部関連日本語教育③センター担当教員による留学生の相談・指導④日本人学生送り出しである。

3 徳島大学での研究内容

本研究員が、実際行ったプログラムは以下のようであった。

- ① 国語としての日本語の知識・資料習得に関して
 - ・総合科学部日本語学担当教員の下での調査
 - ・総合科学部授業受講—「日本語概説」「日本語について考える」「日本語演習」
- ②運用に繋げる外国語としての日本語教育の授業計画及び授業展開・クラス運営の習得に関して
 - ・日本語研修コースでの補助（ティーチングアシスタント、以下TA）
- ③運用に繋げる視点での授業実習に関して
 - ・全学日本語コースでの実習
- ④その他、センターや日本語教育部門主催の催しや交流活動に参加

- ・国際交流サロンー日本語でしゃべらんで
(各テーマ:ひな壇飾り、餅つき、折り紙、阿波踊り)
- ・筆者の工大連携出張授業(脇町高校・城北高校)
- ・日本語研修コース研修旅行(海南小学校)
- ・ホームステイ

⑤ シンポジウムでの発表

- ・第5回日本語教育シンポジウム、7月17日、国際センター主催「世界の日本語教育」にて「河南理工大学外国語学院日本語学部における日本語教育ー現状と問題点」

3.1 日本語研修コース

3.1.1 日本語研修コース概要

本コースは、大使館推薦国費留学生で文部科学省大学院入学前予備教育の留学生を軸とし、学内募集に応じた指導教員より送り込まれ院生・研究生からなる。当該期は、大学院入学前予備教育の留学生2名、学内募集で参加した私費留学生2名、エジプト政府派遣1名の計5名で行われた。実施内容・形態等は以下のようである。

- ・開講時期: 4月8日(水)~9月11日(金)
- ・時間: 月~金 8:40~14:20 (4.5H/日)
- ・学習総時間数: 400時間
- ・使用テキスト:
 - 「みんなの日本語初級I・II」本冊
 - 「みんなの日本語初級I・II」翻訳・文法解説 「みんなの日本語初級I漢字」
- ・教授形態: 終日1教員、チームティーチング
- ・教授法: 直接法
- ・宿題: センター作成宿題長「使える会話」、各教員作成、日記等
- ・試験: ペーパー試験2回、OPI(口頭言語運用能力試験)
- ・屋外学習: 研修旅行、見学、タスク

センターが行っている日本語教育の3本柱の1つである本コースで、開講前準備段階から、修了式までをTAとして係わり、運用に繋げるためのシラバス・カリキュラムー教授法、表記の扱い方、教授内容および教材教具の扱い方、時間配分、クラス運営などや日本語教育を通しての文化・習慣・考え方・マナーなどの授業へ

の取り込み方なども学んだ。またセンターの日本語教育を支援する地域・学生サポーターの取り込み方や屋外学習・タスク等もあわせて指導した。

3.2. 全学日本語コース

本研究員は、中国で4年の日本語教員経験があるので、全学日本語コースで実習を行った。センターの日本語教育の3本柱の2つめである全学日本語コースは、以下のようである。

- ・対象 徳島大学在学の全留学生、研究生 研究者、とその家族
- ・期間: 5月~7月、週2回、全20回
- ・時間: 各90分
- ・クラス: A~Dレベル別(常三島、蔵本)
- ・教授形態: 2名によるチームティーチング
- ・教授法: 直説法
- ・教科書: 「みんなの日本語初級I」1~14課
- ・表記: ひらがな、カタカナ
- ・教具: レアリア、絵カード等
- ・宿題: 国際センター作成宿題帳抜粋、私製等

常三島キャンパスでのA1クラスを専任講師と組んで担当することとした。常三島キャンパスA1クラスは、中国4名エジプト1名の全員男性で大学院生による計5名の小クラスである。当初中国の学生が少ないクラスをと考えていたが、実際ふたを開けてみたらやはり中国勢が多く、やむ終えない状況となり、組んでいる専任教員の指示を受けながら行った。また本人の担当部分の学習項目や教え方については、指導の筆者とミーティングをもち、当該文型や語彙の分析、導入方法、展開の仕方、シチュエーション作り、宿題作成、必要教具等を事前に確認した。シラバスに関しては下記のようなものである。

A1クラス 主なシラバス

回	学習項目
1	1) 表記① *開始前にプレースメント 2) 基本挨拶 テスト実施 3) 教室用語
2	1) 表記② 2) はじめまして、_____です。 どうぞよろしく申し上げます
3	1) _____は、_____です/か 2) ~の~(所属)

4	1) こ、そ、あれ 2) なんですか 3) 私の (N)
5	1) こ、そ、あそこ 2) どこですか 3) いくら
6	1) 時間 ～曜日 2) ～から ～まで 3) ～に Vます/か (含. 過去)
7	1) ～へ Vます/か (含. 過去) 2) だれといっしょに・いつ・なんで 3) ～月～日
8	1) ～を Vます/か (含. 過去) 2) ～で (手段) 3) 電話の会話
9	1) 動詞復習 2) 何をしますか/しましたか 3) ～で(場所) Vます
10	1) Vませんか 2) あげる/もらう 3) 家族用語
11	1) 形容詞 2) Nは、どうですか/でしたか 3) そして/でも
12	1) どんな Nですか 2) 過去形復習 (動・形容詞、名詞+です)
13	1) 好き・嫌いです/か 2) 上手・下手 〃 3) どうして — ～から
14	1) ____に ____があります/います 2) ____は どこにありますか/いますか 3) 助数詞 (いくつ)
15	1) _____を ください _____を _____つ ください 2) もっと やすい のは ありませんか
16	1) 期間 2) _____に _____回 Vます
17	1) V たいです 2) ほしいです 3) _____へ _____に 行・来・帰ります
18	1) て形 2) ～てください はい、どうぞ/わかりました すみません、ちょっと+ ～ から

当該研究員担当

3.2.1 実習状況

担当日前までに教案を作成し、それについて筆者と共に検討を重ねた。しかし教案作成がはじめてであったので、その日の到達目標、必要教材教具、授業の流れが作成できない。本国での指導方法が本を開いてその順番どおりに進め、対訳法で行う授業であったので、その日に何を習得させ、それを習得したら何ができるようになるのか、また運用力をつけるとはという視点をもっていない。徳島大学では、この運用力をつけることを第一とし、そのために学習しているシラバスの実感を持たせるために導入を大事にし、より具体的な物やみんなで経験し知っている具体的な情報を使って導入する。そしてその日の最終的な仕上がりは、与えられたシチュエーションで、そこまでに学習したことを組み合わせ、自分でなんとか言いたいことが言えるというところをもって仕上がりとする。しかし言葉の意味や文型の意味についてはしっかりした知識をもってはいるものの、このような視点がないため実際クラスに入ると、唐突だったり、その場に合わない提示だったりとうまく回らない。

導入後文法整理をしたあとの定着の正確さや流暢さを身につける練習では、パターンプラクティスの方法やチェンドリルをはじめ様々な練習方法を指導し、その習得を目指した。

また教材教具に関しては、使用するのが初めてだったので、絵カードの持ち方や向き・見せ方や教具の扱い方など全て初めての体験であった。これらの点から90分を任せるのは無理と分かり、数回実施後、授業の2/3を実習し、残り1/3を筆者がまとめるという形をとった。

3.3. 授業見学

国際センターでの日本語教育の3本目の柱である共通教育の日本語・日本事情及び総合科学部の「日本語教授法」や非常勤講師による授業も含め日本語授業の見学も行った。

日本で仕事をしている日本語教員は、人の授業を見させてもらう価値やありがたさを知っている上に貴重な機会と捕らえ、積極的に参加するが、本研究員はあまり積極的ではなく、日本に来たからこそ得られる貴重な機会で勉強になるからと何回か促して参加させた。これは国での日本語教育が、教科書に沿った授業で、各教員の思考や研究・工夫が色濃く反映する日本での日本語教育とはかなり違うため、当初はその違いに気づけなかったためと後日判明した。

4 見えてきたもの

4.1 海外での日本語教育上の課題

毎回の授業の事前準備で気づいた点は、導入から仕上げまでの流れが作れないということであった。これは本を開いて、1行目から順にしていく本国でのスタイルのせいであろう。また対訳法で教えていたので、文型・語彙の意味用法はわかってもそれをどう分析し、導入して行ったらいいのかがわからない上、そういうアプローチ自体が生まれて初めての経験であった。

そのため授業も導入から仕上げまでがスムーズに行えず、時には唐突だったり、流れに無理があり、学生が何を要求されているのか戸惑うようなことが開始直後はしばしば生じた。

また「絵教材」という語彙自体を知らなかったようで、その効果的利用法や持ち方などを一から指導する状況であった。

滞在中「みんなの日本語」の新出動詞・名詞について、中国語と意味が異なるものについて調査していたが、その結果約半数以上に及ぶことがわかった。

中国からの留学生のかなりの人達は自国でしかも独学で日本語を学んでくる場合が多い。日本語能力試験の1、2級を持っている人達も多いが、運用を見るとスムーズなコミュニケーションが取れないことがしばしばある。上記のような指導法や漢字に対する誤解も大きな理由ではないだろうか。語彙や文型の語義はわかっても、それをいつ、どういう状況で使えるのか、それを使ったら、相手はどう出るのか、そのシチュエーションは…という視点での日本教育ではないためである。また日本人の考え方・習慣・ルールなどに着目せず中国でのそれらを元に日本語を使用しているの、運用時に時としては、発話者の意図とは違い、失礼であったり、乱暴であったりするのではないだろうか。これは中国に限らず他の国でも同じようなことがしばしば見られる。本研究員の「運用力に繋げる日本語教育は日本での研究・研修で得られた一番の収穫であった。」という弁に、今後の変革を期待したい。

4.2. 受け入れ手続き上の課題

殆どの大学での日本語教育は、国際センター、国際交流センターなどの旧留学生センターでの業務となっている。そのため独自の研究員の受け入れができない。しかし日本の発展に伴い日本語教育が認知されて来た昨今、日本で日本語教育を研究テーマにする大学院生や研修生は今後も増えていくと思われ、大学としての責任も大きくなっていくと思われる。大学の組

織の見直しがなされ、センターでの受け入れが一日も早く望まれる。

参考文献

- 大石寧子・上田崇仁 (2007) 『言葉を知る』から『場面を理解する』を通して『語りたいたことが言える』まで」日本語教育方法研究会誌
- 山内博之 (2005) 「OPI の考えに基づいた日本語教授法」ひつじ書房
- 大石寧子他「終日一教員担当制の引き出す学習環境の安定と言語運用能力の係わり」日本語教育方法研究会誌
- 高見澤猛 (2004) 「新・はじめての日本語教育 2 日本語教授法入門」アスク



海南小学校見学同行。



城北高校 出前授業

美術作品を通した学習の可能性

—共通教育日本語「日本人への提言」を通して—

竹内 利夫

Toshio Takeuchi

徳島県立近代美術館

Gehrtz 三隅 友子

Gehrtz Misumi Tomoko

徳島大学国際センター

要旨：2008年より徳島県立近代美術館と徳島大学国際センターは、美術館と大学という二つの空間を舞台に連携及び協力し、双方がねらいとする「学び」の実践を試みている。美術館は社会教育機関として地域の文化振興を使命にすえ、収集保存・調査研究・展示・教育の事業を行っている。一方国際センターは大学の組織として、日本語教育と学内外の異文化理解への働きかけ、さらには地域の国際化を進める役割を担っている。2010年度は、日本語の授業の中で「留学生が日本語で美術作品を日本人に語る」というタスク活動を行った。本稿はこの活動を日本語教育と美術鑑賞教育の二つの視点で捉え直し、互いが目指す教育とは何か、また連携によってそれが実現しうるのかを考察する。

キーワード：美術鑑賞、日本語教育、異文化理解教育、多文化共生、対話

はじめに

筆者の一人である三隅は、上級者向けの日本語授業として、2001年から2005年にわたり「日本人への提言」を最終課題とするプロジェクトワークを実践してきた。2005年には論考『日本人への提言』が問いかけるもの～NHK視点論点を教材とした日本語学習～(注1)の中で、実践の内省を通して自らの日本語教育観を問い直すことを行った。そこでは、テレビ番組をリソースとした教育活動を次の二つに焦点を当て考察している。一つは生素材を日本語の教材へと加工すること、二つめには最終課題(生産物またはプロダクト)を教室外で日本人に提示し、そこで得た評価をまた学生に還元する、言い換えれば評価を教師以外の日本人へ拡大することであった。

さらに、2008年には初めて美術館と連携し、美術館が子供や一般向けに作成している鑑賞支援プログラムを使って、美術作品を通した留学生(主に日本語レベルが初級から中級の学習者)と日本人との対話を中心としたタスク活動を実施した(注2)。そこでは大学における日本語学習と美術館の意図する美術鑑賞教育の接点はあるのかという「問いかけ」とその際の相互交渉から生まれた「気づき」を丁寧に記述することを試みた。

その後2010年度後期の「日本人への提言」の授業の中で新たな連携として、「教室の外へ出て美術館へ行き、そこで一つの作品を選び、選んだ作品に対する何らかの思いや考えを日本人に対して話し、また聞き手からコメントを

もらう」という対話の活動を入れることを試みた。本稿はこの活動の日本語教育における位置づけ、また美術館を舞台とした美術鑑賞教育という双方向の視点から考えるものである

1 日本語教育の視点

1.1 日本語教育の一つの考え方

国際センターでは初級から上級までのレベルに応じてまた様々な日本語能力の習得を目指した日本語教育を実施している。日本語教員が各々の教育理念に沿って各授業を担当している。その中で三隅の大学における日本語授業「日本人への提言」では、特に次の点を重視している(注3)。それらは、学習者自身が、①学習の目標と方法を確認する②様々なものを日本語学習のリソースとする③生活の中で必要な運用力を認識し、日本人へ働きかける、の三つである。

もちろん、留学生の日本語学習は日本人の外国語学習とは異なり、日本語が第二言語として生活と専門分野の学習に不可欠であるという前提に立っている。教室活動、学校教育という枠組みの中で、またこの枠組みから離れた後も自らが日本語を学ぶ「自律学習」をあらかじめ考えていることに他ならない。最終的にはこの自律学習を可能にする学習環境を教師が設定することを目標としている。

1.2 プロジェクトワークとタスク

前項1.1で述べた目標を実践する教授法としてプロジェクトワークがある。プロジェクトワ

ークは、現実の生活のシミュレーションを含んでおり、「学習者がグループでプロジェクトを計画し、その計画を遂行していく過程で目標言語をできるだけ多く使用することで、目標言語の習得と定着を図る学習活動」と定義される(注4)。すなわち教師が知っている内容、知識が教師から学習者へと注入されるだけではなく、現実の様々な活動に即したタスク活動が行われる。さらにプロジェクトワークには成果発表型、調査型、共同作業型、日本人参加型といった型も存在する。その共通事項は、①教室と現実の生活をつなぐ②学習者がより主体的になる③体験的な異文化接触を起こす活動であることが挙げられる。この特徴に加えて、実際の人的、物的、社会的リソースが組み合わさって教材となる。ここでの教師の役割は、プロジェクトの最終目標を様々なリソースと共に提示し、遂行のためのコンサルティングあるいは学習カウンセリングを行うことである。学習者全体さらに個別の相互交渉も大切にしなければならない。また評価に関しては、教育活動の前後の学習者の状態を比べて、その変化(進歩や向上)から評価(教師が評点を与えるや成績を出すことを含む)するという活動に加えて、関わった全ての者が互いに評価しあうことによって、次回のプロジェクトの改善へとつなげる循環型評価を用いるという特徴がある。

また、プロジェクトワーク型の学習は教室内でテキストを使う学習と違って、その手法を学ぶあるいはその方法を身につけた結果(無意識のレベルの習得)、目標言語を使って周りの社会に働きかけることが容易になり、自律学習あるいは生涯学習へとつながる。それはプロジェクトワークがタスク(task=課題)(注5)活動の組み合わせであることから明らかになる。例えば、2008年に行った美術館との活動もタスク活動といえる(注6)。鑑賞支援のシートを使って日本人との対話を体験した学習者は、日本語の授業で、教師から設定されたタスクを遂行した。これは現実生活へのリハーサルあるいは問題を解くという「教室内タスク」である。しかし授業を離れて、例えば友達になった日本人を誘って美術館へ行ってシートを使って鑑賞を行うとすれば、これはまさに「現実的なタスク」であろう。プロジェクトワークの中で行われるタスクはまさに教室と現実を結ぶ「橋渡しの働き」を持っていること、プロジェクトワークを経験した学習者が、日本人との関わりを通じた生活そのものにその体験が重なっていくことを確認しておきたい。

1.3 多文化共生をめざした日本語教育

さらに、様々な人(民族・人種・国籍)が地域で日本語を使って暮らすという多文化共生の社会への実現が避けられない日本の現状において、日本語教育のあり方を考える必要がある。それは、学習者への日本語教育から日本人への日本語教育という視点である。尾崎(2009)(注7)は、真の共生を実現するためには①制度の壁②心の壁③ことばの壁という三つの壁を崩していくことを挙げ、国や自治体、企業の取り組みはもとより、社会の多数派である日本人自身が異文化・異言語の人々に対する意識を変えていくことの必要性を述べている。意識を変える、変えていくための働きかけとして、前述のプロジェクトワークの果たす役割が強調されるべきであろう。前述の拙稿(注8)で筆者の一人竹内の「気づき」こそが、日本人に期待される変化の一つと考えられる。自分自身のステレオタイプにはじまり、学芸員としての立場を離れた外国人とペアで行った際のコミュニケーションに対する「気づき」である。すなわちプロジェクトワークの三つの要素のうちの「体験的な異文化接触を起こす」は、学習者と日本人の両方に起こりえるものなのである。

2 日本語授業「日本人への提言」

2.1 授業のねらいと実施日程

今回の日本語授業はプロジェクトワークの一つであることを前提として概観する。日程及び素材等は資料1の表に記した。また2010年度後期に素材として扱った番組は、10月に名古屋で行われた「生物多様性条約締約国会議」等の世界を舞台にした環境問題、韓国と日本の関係、さらに一個人としての人間のあり方の変化「こんな私でいたい」・「大衆的個人主義」であった。これらの内容を理解し、そして話者の話し方、伝え方を学び、最終課題として各人が「日本人への提言」を作成(原稿はA4用紙1枚程度、6分以内の発表)することが目標である。この流れの中に美術館タスク(11月21日実施)を導入し、その前には音声に注目(発音学習)するために、クラスを二つのグループに分けて、「飴だま(新美南吉作)」の朗読を録音し自分の声を聞く作業を行った。どちらも最終課題へと向かうための準備活動=タスクである。

2.2 最終課題「日本人への提言」

受講者8名(ウガンダ1名、韓国2名、中国5名)は、最終課題「日本人への提言」としての以下の発表を行った。またスピーチは収録し、

日本語教師を目指す日本人及び異文化理解教育を学ぶ大学生らに原稿と発表（あるいは収録ビデオ）を提示し、提言に対するコメントを記述もしくは共に視聴し話し合う機会を設けた。

- 1 「コンビニでの立ち読みに関して」
- 2 「なぜ、日本ではゴミ箱を設置しないの」
- 3 「ゴミ！決まった時間にしやがれ！」
- 4 「ゴミ処理の違い」
- 5 「幸せな国」
- 6 「素直になれなくて」
- 7 「筆記用具にびっくりさせられるなんてありえない！」
- 8 「ドラッグストアに行きましょう！」

3 美術館タスク「美術館で作品を選んで話そう！聞こう！」

3.1 概要

実施内容は資料2（当日の日程等を知らせた配布用の一部）に記した。当日は、開館20周年記念展「徳島県立近代美術館名品ベスト100」投票で選ばれた「あなたの名品ベスト1」の「ベスト20」作品をはじめとして徳島県立近代美術館が誇る作品を展示中であった。今回は、来館する一般の人だけでなく、同日のイベント「くりえていぶ鑑賞のすすめ—アートを語ろう」に参加する、鑑賞に関心のある人たちの協力を期待した。発表の前には、竹内学芸員による「作品を選ぶ、話す」方法に関して、これまでの経験から出された、子供から大人にいたるまでの例が提示された。昼休みをはさんで、「選ぶ・考える・話す内容を決める・練習する」作業を各自がその場で行い、さらに山木教授のワークショップに参加しその後、発表となった。発表者6名、選んだ作品は5つ、会場で各人にコメントを提出した日本人は20名であった。

3.2 スピーチとコメント

時間は一人5分程度で、作品を選んだ理由を聞き手にわかりやすく語ることを課題とした。また聞き手にはコメント記述用紙を渡した。用紙には発表者と作品名、コメント欄（気づかされたこと、印象的だったことなど）と共感した度合いを「無印・○・◎」の三段階で記入する欄を設けた。留学生は会場入り口から近い順の作品を発表し、聞き手は作品そして話者を取り囲んで聞きながら、奥へと移動する形となった。またこの様子を録画、録音を行った。選ばれた作品は以下の6作品である。

- 1 「Time to Fly・饜嘖」

- 2 「山・石丸一」
- 3 「桜火・谷川泰宏」
- 4 「渇きとスピード・舟越桂」
- 5 「回顧作品その2—ピンポンルーム, 1960—・アンソニー・グリーン」

3.3 活動を終えて

当日の発表内容を録音したものを各自聞いて、文章化することを行った。さらに日本人からのコメントを読むという作業も後の授業で行った。即興で行った自分の日本語を聞いて書き出す、日本人からのコメントを読むことで、自分が言いたかったことは何か、そしてそれがどのくらい聞き手の日本人に伝わったのかを自ら検証した。教師はその際、文法的な誤りを訂正するとともに、発表者の意図が伝わりにくい表現を確認して訂正を行った。また日本人のコメントを発表者ごとに一覧表にし、どのようなコメントをもらったのかが理解できているかも確認した（資料4参照）。

3.4 美術館と教室での活動の比較

また、11月21日に参加できなかった受講者4名には12月21日に教室内で、美術作品等を選びそれについて話すというタスクを課した。発表は教室内のスクリーンに作品を映し出し、その前で発表するという形式で、1「叫び・ムンク」、2「星月夜・ゴッホ」、3「カラスのいる表畑・ゴッホ」、4「光の教会・安藤忠雄」の4つが行われた。

作品の情報を語るのではなくこの作品を通して何を感じたかそして何を伝えたいかを発表することを事前に課していた。これも日本語学習の場では日常で行っている教室内の教育タスク活動である。どちらも作品と向き合うという点では同じだが、違いを学習者の活動プロセスで確認すると、教室での活動は、「頭で作品を選ぶ（これまでの既有知識から）→内容を考える →発表する（教室で） →教師による訂正 →内省する」である。もう一方は、「美術館へいく →目で見て作品を選ぶ →話す内容を考える →発表する →教師以外のコメントをもらう →話した内容を聞いて書き取る →内省する」といった違いがある。

4 美術館タスクとこれからの日本語教育

美術館タスクはプロジェクトワークのリソースの概念から次のように説明することができる。学習者は、物的リソースとしての美術作品（今回の作品は初めて見るもの）に向き合い

それを日本語で語ることを、美術館という空間（社会的リソース）において、教師や同じ学習者以外の日本人（人的リソース）に向けて行いその応えを得た。自らが主体的になり、作品を通した価値観の交換という異文化接触が生まれたといえる。作品に対して向き合い考えることによる内部対話は両方の活動で行われているが、美術館タスクがより広いリソースの組み合わせによって成り立っていることがわかる。さらに現実的なタスク (real-world task または target task) であろう。

「国内の日本語教育が目標とする日本語能力とは？」の答えの一つとして、「日本語ということばをつかって、日本という空間において、日本人（日本語を理解するという意味での）という人間に対して働きかけ、自らの要求を遂行する、すなわち生きていくということ」がいえらう。

その目標に向かうための日本語教師のねらいは、タスクないしプロジェクトワークといった学習経験をもとに、自分の周りの様々なリソースを意識的あるいは無意識的に学習素材と認識し、生活しながら日本語を使い学んでいくという「学びの方法の獲得」が行われることである。そこでは、徐々に日本語の正確さから流暢さが重視され、その過程でまた正確さが必要なことに気がつくといった、この対立項を行きつ戻りつしながら日本語力の習得を目指すのである。正確さをより追求する積み上げ型学習及び教室内での学習を重んじる、どちらも大切にするという立場である。ただしプロジェクトワークは、今回コメントを書いた人的リソースである日本人側の日本語学習と異文化理解教育になっていることをも確認したい。ここには多文化共生社会のための日本語教育としての意味がある。

5 美術鑑賞教育の視点

5.1 活動全体について

筆者の一人である竹内はまずは美術館学芸員の立場で、そして自身が日本語学習の人的リソースとして、また日本語教育の方法を学ぶ日本人としてこの活動に関わった。プロジェクトワーク型の学習から受けた様々な示唆について振り返っておきたい。概して、日本語教育側からの意義と共に、美術館側から言えば美術鑑賞の内容と鑑賞学習のリソース活用の両面ともに注目すべきものがあつた。

活動の舞台となる美術館側での配慮は次の通りであつた。日程については、展示会場で学

習者のスピーチを聞くという活動への協力者が確保できるよう、展示解説などの催事日に日時を合わせ実施できるよう調整した。そして当日、作品との関わり方について短い対話型ガイドダンスを担当した。それは学術的な作品解釈にとられ過ぎて、本来の活動目標のさまたげとなることを避けるためであつた。

5.2 発表内容について

また、発表者6名のスピーチの話題と論旨の整理を次のように試みた（表1）。

いずれも、自分なりの着眼をもとに、聴衆に向けて何らかの働きかけをする論旨となっている。つまり自分の価値観を聞き手に共有させることがねらいである。その内容はスピーチ課題として十分に達成されたものだったと言えるが、これを美術鑑賞教育から見ると、さらに「価値観を持って見る」という重要な学習目標に達している点が魅力的である。このことは後述する。

また話題と具体的な口述が、展示空間という場だから体験できたことや、作品のありのままの形や色に即した事項から構成されている点も注目に値する。例えば発表者の一人金原希のスピーチは、展示会場で作品に遠くから歩み寄っていく過程で、形態の読み取りに変化があつた体験のおもしろさを語り、聴衆にも追体験を誘う（資料3）。作品に近づいたり遠ざかったりすることで見えていなかったものに気づくという行為は、美術館での鑑賞支援の場面で用いられる代表的なうながしの一つである。画集やテレビでは習得しにくい実物観覧のコツを美術館では重視する。金は最初この絵柄を夜空の女神と読み取り、暗い地に浮かぶ小紋に星を見たが、作品に近づくにつれそれが桜の花弁であることに気づく。発表者はこうした経験をごく自然にスピーチへと転じている。

発表者らに当日示された目標は「聞き手に作品から感じたこと、思ったこと、考えたことを伝える」（資料2）であつた。精緻な作品解釈や一人前の美術批評は要求されていないのに、発表者は生き生きと作品の外観と内容をとらえ、自分らしいものの考え方につなげてスピーチしている。様々なリソースに主体的な関わりを持つという、このプロジェクトワークの育む力が、聞き応えのある「美術スピーチ」を生んでいると考えられる。つまり、実物作品の観察をもとに実感の伴ったイメージをつかむという、美術鑑賞の基本的なアプローチがここに達せられている。金の例で言うなら、絵の作者谷川

(表1)

	発表者・作者	話題（主な視点）	論旨（ねらい）
1	申（巖嘔）	自分の好みを分析	人生観に重ねて語る
2	王（石丸）	一目ぼれ・心が落ち着く	故郷や地球への思いを重ねて語る
3	金（谷川）	近づいて発見した経験	経験のおもしろさに誘う
4	カリバ（舟越）	かっこいいと感じた実感	自分のおしゃれ感を重ねて語る
5	柳（グリーン）	認識という観点の気づき	解釈に対しての提案をする
6	斉（グリーン）	絵本のように・幸せな雰囲気	体験にそってレ・ゲーションを試みる

泰宏は装飾性と技巧をきわめた妖艶な女性像で知られ、この作品では桜の爛漫や炎を思わせる絵柄に人の情が託されているのだが、そのような抽象的な表現内容を金は順調に読み取っていったと言ってよいだろう。

5.3 日本人のコメントについて

聴衆のほぼ全員から記述用紙の提出があり、コメント、共感度の二つの欄ともに多くの書き込みがあった。別の催しに参加した後で疲れもあったと思われるが、終始前向きなムードで耳を傾ける様子が見られた。用紙の書き込みの量や正確さからも、聞き手の活動自体に関心の高かったことが推察できる。共感度の欄は8割以上の参加者がほとんどの発表者について◎か○をつけた。竹内の経験では、一般来館者であれ研修などの参加者であれ、このような書き込み式の課題にこれほど執着して取り組む例はまれだと感じられる。

記述用紙には「気づかされたこと、印象的だったこと」、「共感」、「交流」といった語をあげ、聞き手側にも気づきなどの能動性を求めることを示唆してはいる。例えば、「私が『山』についてスピーチしたとしても、王さんのような上手な語りはできなかつたと思います。」といったコメントから読み取れるように、日本語において弱者としての学習者に身を寄せる態度も多くコメントに見受けられた。そもそも聴衆のほぼ全員は先の鑑賞学習の催しの熱心な参加者である。けれども、そうした受容的傾聴へのバイアスとは別の要因として、スピーチ自体の美術作品に即した言説につらなるコメントがほぼ全ての回答であることに注目したい。

例えば前述の金のスピーチに対する日本人コメントは次のように類型化できる。①形や色に関する気づき（1, 3, 6-10, 12, 17-18, 20）、②近づいて見るなど鑑賞行動に関するもの（15-16, 19）、③留学生自身に対する関心（4, 11, 13-14）。作品自体に関わるコメントが半数を越え、鑑賞行動に関するものを含めると7割。留学生自身に関するコメントは3割に満

たない。そこには絵を鏡に肩を並べる鑑賞者の姿がある。「話そう」という実務的な動機の学習リソースに、展示室・作品・聴衆が位置づけられた時、美術館が日常的に行っている作品解説のような講義型プログラムにはない新鮮な作用が生じた。その手応えだけは記しておく。

美術作品の鑑賞の場では、他者の表現している世界像を読み取り、関わっていくという態度と技能が欠かせない。そのような、異なる文化に関わる方法が学ばれる場として、日本語教育と美術鑑賞教育には類似点があるように思われる。発表者のスピーチ内容（学習の過程や態度）に多くの日本人参加者が体験を重ねていったように、両者の自覚的な学びを探る可能性を見るのである。

5.4 活動を終えて —学芸員の立場から—

①学習リソースという考え方について

今回の活動を美術教育の視点で観察すると、「伝えよう・耳を傾けよう」といった簡潔な目標によって、発表者らの生き生きとした鑑賞のプロセスと、その作品に即した視線に気づきや共感を覚える日本人コメントが生まれていることは注目に値する。作品や展示空間が日本語学習リソースとして位置づけられていることで、作品学習や美術史学習の要請は相対的に優先度が一見下がる。それは「かくれたカリキュラム」としても参加者に影響しているように思われる。

これと似た事例に、竹内はこれまで小・中学校の鑑賞教育の実践の場で何回か関わってきた。「記者になって作品を伝える」、「学芸員になって作品を解説する」といった教材である。そこでもやはり「美術の理解」があからさまな目標からいったんなりをひそめる頃合いが肝要で、そうでなければただ歴史史料の調べ学習に終始し図工・美術科の目標に届かない。いずれのケースにも共通するのは、「美術の理解」が手段、過程となっている点である。そして生き生きとそれが手段、過程として機能した時に、一見低められたように見えた作品解釈や美術

史といった事柄に対する学習者の関心も内発的に活性していくと竹内は観察している。「美術の理解が手段となる」とはどういうことだろうか。それは、物事のイメージを伝えたり受け取ったりする力、生きる力として美術教育が学ばれることだと考える。

ひるがえって美術館で行われる作品解説の催しや、作品解説パネルなどについて考えると、その内容はあくまで美術の理解に向かうことを一義としている。これはかつての博物誌の習慣を脈々と継承しているものと言えるが、あらためて美術教育の視点から見つめ直す時、ここで見てきたような気づきを還元していく可能性を思わずにはいられない。

②価値観を持って観ること

発表者らの目標は、美術の説明ではなく美術について伝えることであった。その学習基盤には「日本人への提言」というプロジェクトワークの目標がある。ここに、芸術との友好的な関わり方を自覚的に体験させる効果があった。つまり自己表明（自己表現）が要請されているため、芸術と自分とを定義せねばならない。美術が目標ではないのに、美術へかえってくる。そこが相手意識の薄い「つぶやき」あるいは「調べ学習」の類とも異なる内容を引き出した。価値観を持って観るといふ、美術批評学習としての目標にかなうものをここに指摘できる。

筆者らは2年前に別の留学生たちと、絵を絵札に見立てて作文する「作品カルタ」の活動を行い、そこでは絵を鏡に結果的に自己表現を促すカルタ作りのプロセスが日本語初級者にとって有用であることを実感した。「作品カルタ」は日本語教育、図工・美術科教育のいずれの視点から見ても、自分らしいまなざし（と言葉）を習得させる効果を認め得るものである。「自分なり」を育むカルタ流の活動を引き継いで、さらに「自分なりを活かす（生き抜く）」力の育みとして、このような美術批評学習につながる学びを、多文化共生の学習に重ねてとらえることもできるように思う。

念のため美術批評学習について補足しておく。批評は描写・解釈・評価からなると言われるように、作品の外観をただなぞる説明文や時代背景などの史実に感想を加えるだけでは、美術批評学習としては欠けている。小学校高学年以上の児童生徒の「感想文」によくみかける特徴である。もっともこれは児童・生徒に限った話でもないが、ここで強調しておきたいのは、批評とは価値観の共存を望む活動だということであり、それは物事のイメージを伝えたり受

け取ったりする図工・美術科の学びの根本を支える課題である。難しいことを言うのが批評なのではなく、絵を前に肩を並べてコミュニケーションが本当にできるということなのではないだろうか。

6 考察

以上のように本活動を互いの立場で概観してみた。そこで双方の評価をまとめたい。

1) 全体を通して 【他分野からの刺激】

日本語教育と美術鑑賞教育といった二つの異分野からの刺激は十分にあったこと、活動を実施したこのような振り返りの作業を行うことで、インフォメーションギャップからの情報交換が進んだことがあげられる。プロジェクトワークといった言語学習の目指すものが「生きていく力」の獲得であること、また「生きるために伝える」という能力活用の中で、鑑賞の内容と、また題材活用の両面で注目すべきものがあつた。

2) 2008年との比較 【タスクの背景、発展性】

前回同様プロジェクトワークの共同性は互いに感じられた。鑑賞学習の面で比較すると、前回はクイズやカルタといったタスクのルールの上で鑑賞行動が完結している。今回はプロジェクトワークの最終課題「日本人へ向けて何かを提言できるようになる」のプロセスの中に位置づけられたタスクであった。そこに能動的・表現的な鑑賞活動が営まれたことで、「美術を使う」ことの積極的意義がより鮮明に認められたと考える。前回の報告に記した通り、日本語初級者にとって、自己を投影しやすいカルタのような活動には、クイズなどで分析的に作品理解へ向かわせる類の教材とは異なる利点があるように思われる。今回の結果と合わせて発展的に検討を重ねたい。

徳島県立近代美術館で開催される特別展や所蔵作品展に並ぶ作品の大半は、近・現代美術であり「わかりにくい」と思われがちなものである。けれども日本語教育（あるいは美術教育）の物的リソースとして作品をとらえた場合、このわかりにくさも多様な価値観を受けとめてくれる寛容な鏡として機能するのではないかという感触を、筆者らは抱いている。また一般の来館者に向けて日本語教育の活動に触れてもらい、強い反応を得たことは貴重な経験となった。引き続き美術作品を通じた活動を地道に探っていきたいと考えるところである。

7 むすびにかえて

2月に「日本人への提言」発表をまとめた冊子と発表そして収録を終えて、その評価を日本人(学生及び一般)から得ている中で、6名に美術館タスクの役割に関してコメントを得た。その中には①自分で一つの作品を選んで話すことから、作品を理解する気持ちが深まったこと②日本人からのコメントをもらうことから作品を通じた交流ができたこと、特に共感をもらった点がうれしかったこと③みんなの前で話すという日本語能力と録音を聞いて書き出すときに自分の日本語の癖について気づいたことがあげられていた。実施者側のねらいが得られた活動になったといえるだろう。

美術館タスクに関しては、選んだ作品・発表コメント・日本人からのコメント・最終的に考えたことの6名分の今回の成果をリーフレットとして、これからの美術館教育そして日本語教育の手引きとして作成することになった。また「日本人への提言」に関するスピーチ原稿と日本人からのコメント集を成果物として活用する予定である。今後も互いの目標を確認しそれらをよりよく実現するための活動を実施し、社会的な立場を踏まえ、地域の多くの人と人を「学び」の視点で結ぶことに貢献したいと考える。

注

- 注1 山田久美子・Gehertz 三隅友子(2005)「日本人への提言が問いかけるもの～NHK 視点論点を教材とした日本語学習～」徳島大学留学生センター紀要1号P.37-59
- 注2 竹内利夫・Gehertz 三隅友子・橋本智(2009)「美術館の鑑賞支援プログラムとの連携—美術作品を通じた学習の可能性—」徳島大学国際センター紀要5号P.17-24
- 注3 この問いかけにとその答えに関しては、注1拙稿「日本人への提言が問いかけるもの」P.47に詳述している
- 注4 田中望他(1993)「日本語教育とその理論」日本放送出版協会P.131
- 注5 タスクを Nunan(1989)は「学習者が目標言語で理解、操作、そしてインターアクトする必要のある、意味に焦点の当てられた作業の一つ」とし、現実生活のためのリハーサルや問題を解くといった教室内の「教育的タスク」と現実世界で実際の成果を求めるタスク「現実的なタスク」の二種類をあげている。Nunan, David

(1989)“Designing Tasks for the Communicative Classroom” Cambridge University Press 及び Nunan, David (1999). Second Language Teaching & Learning. Boston: Heinle & Heinle Publishers. から引用。プロジェクトワークとタスクの関係は、いくつものタスクの総体がプロジェクトと考えられるため、日本人の提言といったプロジェクトワークの中に美術館タスクがあり、またこれも一つの活動としてミニプロジェクトワークとして名づけることも可能である。本稿では美術館タスクとして記述する。

- 注6 詳細は注2の文献P.18-20に三つの活動について記述している
- 注7 尾崎明人(2009年9月12日)「多文化社会における地域日本語教育の在り方と方法を考える」講演資料より 徳島大学国際センター平成21年度第二回日本語教育シンポジウム
- 注8 詳細は注2の文献P.213.1「気づき」に記述している

参考 URL

- ・徳島県立近代美術館：
<http://www.art.tokushima-ec.ed.jp/>
- ・徳島大学国際センター：
<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/>

資料1

日本語8

2010 年後期

概要：NHK テレビにて放映される「視点・論点」の中から随時ピックアップしたものを教材として使用。国際問題・社会問題、事件等を専門家が8分間で解説する番組である。専門家が説明する内容と専門家からの提言を理解することと、話し手のスピーチスタイルを学ぶ二つを学習目的とした。最終課題として「日本人への提言」という題名で各自テーマを決めて発表する。

回	月日	内容	備考
1	10/5	自己紹介 OUR徳島を読む	教材及び授業方法の紹介
2	10/12	「海岸線の今を追って」 ① 山口	環境問題(日本を取り巻くゴミ問題)
3	10/19	授業の方法と取り組み方の確認・ことば確認	話しの内容と話し方を確認する
4	10/26	「生物多様性」 その1 ② 内山	テーマ:環境問題
5	11/9	「生物多様性」 その2 ③ 栗野	ジグソーリーディングの手法
6	11/16	「飴だま」 新美南吉 朗読・録音	声だし・テープ録音
7	11/21	<美術館活動Ⅰ>	県立近代美術館にて
8	11/30	美術館プロジェクト振り返り・朗読作品「飴だま」を聞く	日本人の感想と自分の文字起こし
9	12/7	「こんな私でいたい」 ④ 横江	表現の方法、話し方
10	12/14	「韓流」と「日流」の文化交流 ⑤ クォン・ヨンソウ	外国人の日本語
11	12/21	<美術館活動Ⅱ> 続き	美術作品発表(教室にて)
12	1/10	「大衆的個人主義」 ⑥ 小浜 玄米先生の弁当箱 マガ	話す内容と話し方 速度
13	1/17	発表準備 前期の人の発表を読む	前期の「日本人への提言」冊子
14	1/25	発表練習① 構想を練る	
15	2/1	発表練習② 書いたものを読む	一人6分くらい
16	2/8	発表録画	教室にて 8名
★	2/17	発表会 日本人と自分たちのビデオを観て話し合う	異文化コミュニケーション授業に参加
☆	2月末	ビデオと冊子を使って日本人からコメントをもらう作業	さらに冊子の作成へ

資料2 当日に実施のための学生用配布資料

内容：美術館の作品を一つ（比較するならば二つ三つも可能です）選んで、一人5分の時間を使って、聞き手に作品から感じたこと、思ったこと、考えたことを伝える。

場所：

徳島県立近代美術館（徳島県文化の森総合公園）

時間及び予定

10:05 市原行きバス乗って出発

10:20 市原 乗り換え

10:25 文化の森行きバス乗車

10:30 近代美術館着

10:40 竹内学芸員によるワークショップ

作品見学 作品を選ぶ 話す内容を考える

（作品が決まり次第、三隅に連絡すること！順番を決めてシートを作成します）

各自 食事（食堂もありますが、お弁当持参でもかまいません）

14:00 「くりえていぶ鑑賞のすすめーアートを語ろう」参加

山木朝彦教授（鳴門教育大学）と仲田学芸員の講座

15:00 徳島大学留学生の発表 一人5分

作品の前にて 順番に 観客は鳴門教育大学の学生や一般の方々です

発表は録画します、落ち着いて自分のメッセージを伝えてください。

16:00 終了予定 16:30・16:55（市原乗り換え）・17:20（直行）のバスで徳島駅へ

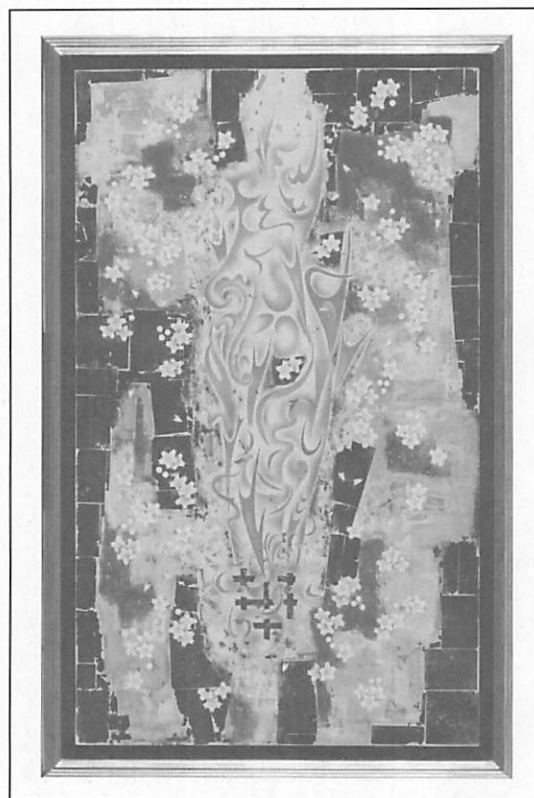
資料3

<選ばれた作品とその発表例>

「桜火(谷川泰宏)」 金原希(きむ うおんひ) 韓国

こんにちは。韓国から来た金原希と申します。

僕がこの絵を選んだ理由は、僕はこの絵をあの前向きから見たんですけど、そこから見た感想と作家が書いた感想がまったく違っていたので、これがおもしろくて選びました。遠くから見た僕はこの辺りを女性の顎と唇だと思ってこれがてっきり女性と、そして後ろの桜が星だと思っていたので、夜空に何か女神が下りてるような、そういう絵だと思ってたんです。だけど、この近くに来るまでてっきり星だと思ったのは桜でこれが炎だとゆうから完全に違ってましたね。その点がおもしろくて選びました。近くに来て、ここまで来て見てるのに、これを見るまで桜とわかりませんでした。何か、一度星と見たらそれが固定観念になったのか、近くに来るまでずっと星に見えるのがおもしろいでした。炎の方が何か女性のように見えませんか？僕は今でもあまり炎とは見えないんです。そんな僕が見た観点と、本当の話題が完全に違ったことがおもしろくて、興味が湧いてこの作品を選びました。何か質問ありませんか？



「桜火 (谷川泰宏)」 1991

資料4 日本人からのコメントと コメントを読んだ感想(2月)

3 <「桜火(谷川泰宏)」 金原希(きむ うおんひ) 韓国>

	コメント	印
1	・遠くから見たイメージが作者の本来の画風と合っている。	◎
2		
3	・女性のように見えたのは共感。遠くから見る見え方と近くから見る見え方の違いに共感。	◎
4	・遠くと近くと見る事がちがうことを説明することや固定観念という言葉をはなしたのが印象的でした。	
5	・絵に対する第一印象を大事にしている。	
6	・まわりが着物の柄のようにも見えて女性が着ているようにも感じます。	○
7	・炎が女性に見える。	
8	・桜の花びら→星 炎→女性 金さんが言ったので私も女性に見えてきました。	◎
9	・女性がいる・星空から女性が舞い降りる。	◎
10	・直感で感じたことを素直に言葉にされていて、新たな視点に気づけた。	◎
11	・女性にみえた自分とキャプションのちがいをおもしろく感じたという点	◎
12	・女神が降りてきたなど女性に見えたと聞いてふりそでを着た女性に見えた。	◎
13	・わかりやすい日本語だった。自分と違う視点で見ていると思った。	
14	・明るい性格の方と思います、炎が女性に見えたのはおもしろい(するどい)感性と思います。	◎
15	・遠くと近く、固定カンネン	
16	・遠くから見るのと近くから見るのでは作品の印象がずい分変わってきますね。	○
17	・私はこの絵にあまり興味をもっていなかったのですが、金さんのお話で いろいろな見方ができることに気づかされました。とくに女性のように見えるというところになるほどと思いました。	◎
18	・女性に見えたという見方がおもしろいと思った。夜空に女神が舞い降りた・・というふうに見ようと思うと確かにそう見えて、新しい見方ができた。	○
19	・作品を遠くからも近くからも鑑賞されていて、いいなと思いました。	○
20	・炎が女性のようなと言っていたのが印象的でした。言われてみると本当だと思いました。	◎

<2月の感想>

多くの人が真面目の感想を書いてくださってびっくりしました。炎が女性に見えると言う私の感想に同意してくださる人が多かったので、何か嬉しかったです。その上に桜や後ろの背景が振袖や着物に見えるという感想もありましたので、そんな視点もあったなと思いました。もう一度あの絵を見る機会があったらまた違う視点は無いか探してみたいです。

第二部

国際センター一年報

第7号

第二部 国際センター 年報第7号

目次

2010年度の主な行事	31
日本語教育	33
日本語研修コース（大学入学前予備教育）	33
全学共通教育「日本語」・「日本事情」・「国際交流の扉を拓く」	37
総合科学部 日本語教育関連授業	45
全学日本語コース	48
アジア人財資金構想（アジア人財コース）	51
学生派遣関連	52
指導・相談関連	56
その他	57
徳島大学卒業留学生同窓会（中国・韓国）	57
国際交流サロン	59
サポーター制度	61
地域貢献	63
English Chat Room	65
教員出張（センター関連のみ）	66
留学生在籍状況	68
国際センター組織図	70
国際センター規則	71
国際センター運営委員会規則	74
学術協定校一覧（2011年2月16日現在）	77
国際センター人員名簿（2011年2月1日現在）	79

2010年度の主な行事

4月	9日	春期日本語研修コース開講式
	22日	前期 English Chat Room 開始 (毎週火曜・木曜)
	22日	新入学留学生ガイダンス (常三島地区)
	23日	新入学留学生ガイダンス (蔵本地区)
5月	10日	全学日本語コース春期開講
	15日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんで一餅つき」
	19日	韓国海洋大学校演習船「ハンバダ号」寄航 ～21日
6月	12日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんで一折り紙」
7月	7日	日本語研修コース研修旅行 (海南小学校他)
	16日	全学日本語コース春期終了
	16日	「国際化講座」(徳島県職員のための)
	17日	大連理工大学日本語教員研修コース ～25日
	20日	前期 English Chat Room 終了
	23日	外国人留学生奨学金授与式
	25日	ヘルスバイオサイエンス・サマープログラム ～1日
	31日	日本語研修コースホームステイ ～2日
8月	2日	ソシオテクノサイエンス・サマースクール ～6日
	4日	藤井・大塚国際交流資金による奨学金受給留学生の寄付企業訪問
	7日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんで一阿波踊り」
	10日	春期日本語研修コース修了式
	17日	大連理工大学 IT 技術・日本文化体験コース ～26日
	23日	日本企業見学研修 (三菱自動車、アサヒビール)
	25日	日本文化体験交流会 (伊方発電所見学) ～26日
10月	8日	秋期日本語研修コース開講式
	12日	後期 English Chat Room 開始 (毎週火曜・木曜)
	25日	全学日本語コース秋期開講
	29日	新入学留学生ガイダンス (常三島地区)
	30日	多文化体験交流会 (於：工業会館)
11月	2日	日本ビジネス・文化研修旅行 (大塚製薬・脇町)

11月	28日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんでーお国紹介」
12月	4日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんでー茶道」
	17日	秋期日本語研修コースホームステイ ～18日
	17日	平成22年度アジア人財資金構想事業留学生就職支援セミナー
	27日	現地見学研修旅行（鈴鹿 ホンダ自動車、奈良） ～28日
1月	6日	スキー旅行（鳥取県若桜・氷ノ山スキー場）
	22日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんでー着物の歴史」
	22日	徳島大学 卒業留学生同窓会（中国）
	23日	徳島大学 卒業留学生同窓会（韓国）
	27日	後期 English Chat Room 終了
2月	4日	「多文化共生の社会をめざしてー徳島を考えるシンポジウム」
	7日	全学日本語コース秋期終了
	25日	アジア人財資金構想コース修了
	26日	国際交流サロン「日本語でしゃべらんでーひな壇飾り」
3月	3日	国際展開推進シンポジウム「母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」 徳島大学外国人留学生の卒業・修了を祝う会
	4日	秋期日本語研修コース修了式

日本語教育

日本語研修コース（大学入学前予備教育）

1. コース概要

- ・ 文部科学省大学院入学前予備教育（大使館推薦）、教員研修生を対象とし、大学院内外での生活を一人で成人として乗り切れる日本語力を身につける。
- ・ 学内公募生も対象とする。
- ・ 集中講習型で実施する。
- ・ 日本の文化・習慣・常識・ルール等を授業に盛り込み、日本人との活動も含む日本語学習を実施する。

2. コーディネーター：大石 寧子（平成 22 年度）

3. 実施概要

- ・ 平成 22 年度春期

① 開講時期：平成 22 年 4 月 8 日（水）～9 月 11 日（金）

② 日程

4 月 07 日（水）	コースオリエンテーション・授業開始
4 月 09 日（金）	開講式
5 月 15 日（土）	地域・日本人学生と日本語を使って交流① －餅つき
6 月 12 日（土）	地域・日本人学生と日本語を使って交流① －折り紙
6 月 15 日（水）	第一分冊試験
6 月 19 日（金）	県南訪問（海陽町、美波町）
7 月 30 日（金）・31（土）	ホームステイ
8 月 06 日（木）	第二分冊試験
8 月 07 日（土）	地域・日本人学生と日本語を使って交流③ －阿波おどり
8 月 10 日（火）	修了式

③ 受講生

No	種別	国籍	性別	進学先
1	国費留学生	ケニア	女	徳島大学栄養生命科学教育部
2	国費留学生	ペルー	女	徳島大学口腔科学教育部
3	学内公募生	中国	男	徳島大学先端技術科学教育部
4	学内公募生	中国	女	徳島大学先端技術科学教育部
5	学内公募生	エジプト	女	徳島大学先端技術科学教育部

④ 教材、担当及び時間割

・ 使用テキスト：

「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」本冊	スリーエーネットワーク
「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」翻訳・文法解説	スリーエーネットワーク
「みんなの日本語初級Ⅰ漢字」	スリーエーネットワーク

・ 学習総時間数：400 時間

・ 担当及び時間割

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
担当	青木	大石	遠藤	橋本	中村
場所	常三島	新蔵	常三島	新蔵	常三島
08:40～10:10	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
10:25～11:55	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
12:50～14:20	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語

⑤ 最終課題（スピーチテーマ）

「とうにようびょうのけんきゅう」	ケニア
「日本での四か月のせいかつ」	ペルー
「日本語との格闘」	中国
「言語翻訳を研究します」	中国
「わたしとむすめとどちらが上手ですか」	エジプト

平成 22 年度秋期

① 開講期間：平成 22 年 10 月 07 日（木）～平成 23 年 3 月 01 日（火）

② 日程

10 月 06 日（水）	コースオリエンテーション・授業開始
10 月 08 日（金）	開講式
10 月 31 日（土）	地域・日本人学生との交流①－書道
11 月 02 日（火）	日本ビジネス・文化見学（大塚製薬・脇町）
11 月 28 日（土）	地域・日本人学生との交流②－お国紹介
12 月 04 日（土）	地域・日本人学生との交流③－茶道
12 月 17 日（金）	ホームステイ（～12/18）
12 月 23 日（木）	冬休み開始
01 月 11 日（火）	授業再開
01 月 22 日（木）	地域・日本人学生との交流③－世界の料理
02 月 05 日（土）	地域・日本人学生との交流④－着物の歴史
02 月 26 日（土）	地域・日本人学生との交流⑤－雛壇飾り
03 月 01 日（火）	第二分冊試験
03 月 04 日（金）	修了式

③ 受講生

No	種別	国籍	性別	進学先
1	国費留学生	クウェート	男	徳島大学総合科学教育部
2	学内公募生	中国	男	徳島大学先端技術科学教育部
3	学内公募生	中国	男	徳島大学先端技術科学教育部
4	学内公募生	中国	女	徳島大学先端技術科学教育部
5	教員研修生	インドネシア	女	鳴門教育大学
6	教員研修生	フィリピン	女	鳴門教育大学
7	教員研修生	ソロモン	男	鳴門教育大学

④ 教材、担当及び時間割

・ 使用テキスト：

「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」本冊	スリーエーネットワーク
「みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ」翻訳・文法解説	スリーエーネットワーク
「みんなの日本語初級Ⅰ漢字」	スリーエーネットワーク

・ 学習総時間数：360 時間

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
担当	青木	大石	遠藤	橋本	大石／橋本
場所	常三島	新蔵	常三島	新蔵	新蔵
08:40～10:10	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
10:25～11:55	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語
12:50～14:20	日本語	日本語	日本語	日本語	

⑤ 最終課題（スピーチテーマ）

「2011年は、とくべつな年です」	クウェート
「写真の検索方法」	中国
「ロボットの精度の研究」	中国
「コンピュータは、文を読むと感情がわかります」	中国
「新しい英語のおしえかたをべんきょうします」	インドネシア
「すばらしいけいけん」	フィリピン
「ソロモン」	ソロモン

全学共通教育「日本語」・「日本事情」・「国際交流の扉を拓く」

1. 日本語：日本語 1～8、日本事情：日本事情 I～IV

平成 22 年度共通教育「日本語」「日本事情」では以下のクラスを開講した。

- ・ コーディネーター：三隅 友子

概要：

昨年引き続き新入学部学生が少なく、また受講者のほとんどが協定大学の交換留学生で、日本語能力試験 1 級以上の能力を持っていたため前期後期を通じて様々な学習活動が展開できた。交換留学の期間が 10 月から 9 月のため、前期と後期では受講者が入れ替わっている。

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1・2					
3・4			日本事情 I・II	日本事情 III・IV	
5・6					
7・8	日本語 1・2	日本語 7・8			
9・10	日本語 3・4	日本語 5・6			

前期：日本語 1・3・5・7 日本事情 I・III、 後期：日本語 2・4・6・8 日本事情 II・IV

日本語 1 前期

- ・ 担当者： 遠藤かおり
- ・ 受講人数： 3 名（マレーシア、ウガンダ、中国）
- ・ 使用教材： 『大学で学ぶためのアカデミックジャパニーズ』、
佐々木瑞枝他 The Japan Times
- ・ 概要：

本講義では、テキスト中心に各課のテーマに沿った内容を扱った。授業の流れとしては、まず学習する課のテーマに関する予備知識を確認し、新出語彙を説明した後、会話練習や聴解、読解、要約、作文などの練習に入るという流れである。留学生が大学生活に慣れること、そして大学生活をしていく上で必要な日本語力を身につけ、大学での様々な場面に対応できることを目標とした。そのためクラスでの活動は、留学生が実際に遭遇するであろう場面を設定し行った。

日本語 2 後期

- ・ 担当者： 遠藤かおり
- ・ 受講人数： 2名（マレーシア、ウガンダ）
- ・ 使用教材： 『大学で学ぶためのアカデミックジャパニーズ』、
佐々木瑞枝他 The Japan Times
- ・ 概要：
本講義では、テキスト中心に各課のテーマに沿った内容を扱った。授業の流れとしては、まず学習する課のテーマに関する予備知識を確認し、新出語彙を説明した後、会話練習や聴解、読解、要約、作文などの練習に入るという流れである。留学生が大学生活に慣れること、そして大学生活をしていく上で必要な日本語力を身につけ、大学での様々な場面に対応できることを目標とした。そのためクラスでの活動は、留学生が実際に遭遇するであろう場面を設定し行った。

日本語 3 前期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 8名（マレーシア1名、韓国2名、中国5名）
- ・ 使用教材： 『パパとムスメの7日間』 館ひろし、新垣結衣主演 DVD
TBS テレビ、及び 視聴用自主作成補助教材
- ・ 概要：
生教材を使うことよって、より現実に近い日本語を学ぶことを目標とした。特に本教材では、学校、家庭そして会社という場面によって違う、生きた「日本語」と、コミュニケーションに必要な非言語の要素（表情・声・動作）にも注目し、ストーリーを理解するだけでなく深く日本語及び日本社会を理解することを目的とした。学生の言葉や会社での地位による待遇表現の使い分け等を確認し、また話し合いを行った。

日本語 4 後期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 10名（中国5名、韓国3名、マレーシア1名、ウガンダ1名）
- ・ 使用教材： 『ハケンの品格』 篠原涼子主演 DVD フジテレビ映像企画部
及び 視聴用自主作成補助教材
- ・ 概要：
生教材を使うことよって、より現実に近い日本語を学ぶことを目標とした。

特に本教材では、会社における様々な場面を通して、生きた「日本語」と、コミュニケーションに必要な非言語の要素（表情・声・動作）にも注目し、ストーリーを理解するだけでなく細部の日本語及び日本社会を理解することを目的とした。各時間後にドラマについて話し合う「対話の場」を設け意見交換をした。最終課題は次期学習者に対する推薦コピー（ドラマの見所、学ぶポイントを短くまとめる）を作成した。

日本語 5 前期

- ・ 担当者： 大石寧子
- ・ 受講人数： 7名
(韓国1名、中国4名、ウガンダ1名、インドネシア1名)
- ・ 使用教材： 「大学・大学院 留学生の日本語 - 論文読解編」アカデミック・ジャパニーズ研究会 アルク、論文、新聞・雑誌の記事、広告 他
- ・ 概要：
大学生活においてレポート・論文は勿論のこと、様々な文章を書く機会が多い。そのための表現力（語彙力・文法力・文章構成力）を身につける。その基礎として異なったタイプの文章の読解演習を入口として、「読む」能力を向上させると共にそれを支える「書く、話す、聞く」の四技能全てを伸ばす様々なタスクをピアワークを通して行った。最終的には自分の思いや考えを短い文の中で最も的確に表現する手段として①自国②徳島大学または母国の大学③徳島の3つのキャッチコピーを作成した。

日本語 6 後期

- ・ 担当者： 大石寧子
- ・ 人数： 9名
(韓国3名、中国4名、ウガンダ1名、インドネシア1名)
- ・ 使用教材： 「ピアで学ぶ大学生活の日本語表現」大島弥生他 ひつじ書房、「日本語Eメールの書き方」築 晶子他 The Japan Times 他
- ・ 概要：
大学生活で必要な「小論文作成」を最終目標とした。論文の書き方の前に、短い文の中に必要最低限の情報を盛り込む練習として「メールの書き方」を学習した。お願い・誘い・お詫び・断りなどをテーマにし、作成上のルール、構成、添付方法なども含めて学び、宿題の提出を実際にメール添付の形で毎

回実施した。その後小論文の作成を目標とし、マッピングやピアワークでテーマを決め、それ以降もクラスのメンバー、日本人学生、地域日本人とのピアレスポンスを通して論点の絞り込みを行い、書き進めていった。またデータの1つとして、アンケートの作成・アンケートの取り方・集計・分析のしかたも学習した。

日本語7 前期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 7名（韓国1名、ウガンダ1名、中国5名）
- ・ 使用教材： 『視点・論点』NHK テレビ放送番組
及び 関連資料と自主作成教材
- ・ 概要：
NHK 総合テレビにて放映される「視点・論点」の中から随時ピックアップしたものを教材として使用した。国際問題、社会問題、事件等を専門家が8分間で解説し、専門家としての提言を理解することと、話し手のスピーチスタイルに関する学習を目的とした。最終課題として、「日本人への提言」原稿を作成しそれをもとにしたスピーチ発表会を日本人の聴衆の前で行った。スピーチのテーマ以下であった。
 - ① 「日本人のお礼のことばー」
 - ② 「ベランダ、コイン、そしてお金？」
 - ③ 「ウガンダを知っていますか」
 - ④ 「音楽を聞きましょう？」
 - ⑤ 「どうして日本のカラスは・・・」
 - ⑥ 「観光誘致大作戦！」
 - ⑦ 「中道の道—その理念を解くー」

日本語8 後期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 8名（ウガンダ1名、韓国2名、中国5名）
- ・ 概要：
NHK 総合テレビにて放映される「視点・論点」の中から随時ピックアップしたものを教材として使用した。国際問題、社会問題、事件等を専門家が8分間で解説し、専門家としての提言を理解することと、話し手のスピーチスタイルに関する学習を目的とした。最終課題として、「日本人への提言」原稿を作成した。授業内で扱ったテーマは以下であった。1「海岸線の今を追って」2「生物多様性1・2」3「こんな私でいたい」4「韓流と日流の

文化交流」5「大衆的個人主義」また、この間に朗読作品作成「飴だま（新美南吉作）」及び美術館プロジェクト（美術館で作品を選んで聴衆の前でミニスピーチをする）を実施した。提言のスピーチは収録し、日本人と共に視聴する機会を設けた。

「日本人への提言」の各テーマは以下である。

- ① 「コンビニでの立ち読みに関して」
- ② 「なぜ、日本ではゴミ箱を設置しないの」
- ③ 「ゴミ！決まった時間にしやがれ！」
- ④ 「ゴミ処理の違い」
- ⑤ 「幸せな国」
- ⑥ 「素直になれなくて」
- ⑦ 「筆記用具にびっくりさせられるなんてありえない！」
- ⑧ 「ドラッグストアに行きましょう！」

本授業内の美術館プロジェクトに関しては、紀要6号に詳細を報告している。

日本事情 I 前期

- ・ 担当者： 橋本 智
- ・ 受講人数： 5名（中国3名、ウガンダ1名、インドネシア1名）
- ・ 使用教材 アジア人財 AOTS 配信教材「就活へ！はじめの一步」
日本経済新聞 他

概要：

アジア人財コースの内容を引き継ぎ、国内外の日本・日系企業に将来就職を希望する外国人留学生に対して、就職活動を行い就職後に日本人と働くために必要な情報を提供し、同時にビジネス場面で使われる語彙の習得を含む日本語レベルの向上を目指した。

主な内容は以下の通り。

- ① 新聞の読み方
- ② 就職活動の流れ
- ③ 企業へのエントリーの仕方・記入
- ④ 採用情報の集め方
- ⑤ 会社説明会への申し込み・資料請求
- ⑥ 電子メールでの依頼
- ⑦ 社会人基礎力
- ⑧ 自己表現活動
- ⑨ 履歴書

⑩ ビジネスマナー

⑪ 業界研究

日本事情Ⅱ 後期

- ・ 担当者： 橋本 智
- ・ 受講人数： 10名（中国5名、韓国3名、ウガンダ1名、インドネシア1名）
- ・ 使用教材 アジア人財 AOTS 配信教材「仕事と家族プロジェクト」
日本経済新聞 「一歩先行く!!新入カトレーニング」 他
- ・ 概要：

前期に引き続き、日本・日系企業に将来就職を希望する外国人留学生に対して、必要なスキル、能力や日本語力のアップを目標に授業をした。加えて、将来自分の同僚になる日本人のものの考え方や生き方などを、家族と仕事というトピックを通して学んだ。

主な内容は以下の通り。

- ① 就職活動の理解
- ② ビジネスマナー
- ③ 敬語
- ④ ビジネス場面での会話の流れ・表現(電話やメールでのやり取り)
- ⑤ 社会人基礎力
- ⑥ 企業・業界研究
- ⑦ 仕事と家族
- ⑧ 新人としての会社内での振る舞い

日本事情Ⅲ 前期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 8名（マレーシア1名、ウガンダ1名、中国4名、韓国2名）
- ・ 概要：「徳島を『食べる』プロジェクト」

吉野川が徳島独自の農業に重要な役割を果たしていることにヒントを得て、また留学生の日本の食についてさらに学びたいという要望から、実施に至った。前半は「玄米先生の弁当箱（魚戸おさむ画、北原雅紀原作）」のマンガを使い、食文化に関するトピック（食育・メタボリック・箸文化等）について理解を深めた。そして県内の様々な機関や施設に出向き、特に「食べる」ことを意識して、さらに五感を使う体験学習を進めた。

2010 年前期 講義及び体験活動	
1	給食体験（吉野川市鴨島中学校）
2	鳴門わかめヨーグルトピザ試食 （地産地消）
3	家庭料理（渭北公民館）
4	徳島食体験（徳島大学碧水寮）



日本事情IV 後期

- ・ 担当者： 三隅友子
- ・ 受講人数： 8名（マレーシア1名、韓国1名、ウガンダ1名、中国5名）
- ・ 概要：「吉野川プロジェクト」

メインテーマを「徳島を知るー吉野川の役割ー」とし、徳島のシンボル、心の故郷「吉野川」を様々な側面から学んだ。各分野の人から「吉野川」に関する話を聞く、また関連する施設を訪問する、活動を通して吉野川に関する理解を深めた。最終課題は各自テーマを見つけて調査を進め、パワーポイントによる発表を行った。

2010 年後期 講義及び体験活動	
1	吉野川の概要（国土交通省）講義
2	吉野川の農業（野田靖之氏）講義
3	観光資源としての吉野川 （徳島県西部総合県民局）
4	吉野川と住民運動（中嶋信教授）講義
5	各自調査体験学習 第十堰・河口探検・吉野川フェスティバル



2. 共通教育 共創型学習「国際交流の扉を拓く」後期 金成海、大石寧子、坂田浩

- ・ 受講人数： 25名（日本人学生18名、交換留学生4名、社会人3名）
- ・ 実施内容：

私たちのまわりの「文化」を日本人と外国人の視点からとらえ直す。受講者の対話を通して「文化」・「交流」とは何かを考える。①国際交流とは、②異文化理解とは、③共に生きるとは、をテーマに「異文化コミュニケーション」、「日本語と文化理解」、「留学生事情」をはじめ、様々な視点から講義及び体験学習を行った。授業日程および各回の内容は、以下の表のとおり。

回数	実施日	担当者	タイトル	
1	10月06日	坂田	オリエンテーション	
2	10月13日	金	徳大の留学生事情を知る	
3	10月20日	坂田	自分を知る&異文化を知る（1） ・自分を知る手掛かり（COMタイプなど） ・異文化を知る手掛かり（冰山モデルなど） ・多様な文化の中で「外国人」として生きる手掛かり	
4	10月27日	坂田		
5	11月10日	坂田		
6	11月17日	坂田		
7	11月24日	坂田		
8	12月01日	坂田		
9	12月08日	大石		異文化を知る（2）&「日本語」を知る ・外国語としての「日本語」を知る ・日本語教育が担うものは ・日本人が身につける「日本語」 ・「日本語」から生じる問題分析と対応 (ケース・スタディ)
10	12月15日	大石		
11	12月22日	大石		
12	01月12日	大石		
13	01月19日	大石		
14	01月26日	大石		
15	02月02日	大石		
16	02月09日	坂田	総括授業	

総合科学部 日本語教育関連授業

国際センターの日本語教育担当教員が総合科学部の日本語教育に関する専門科目を担当している。

時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1・2				日本語教育演習（前期）	
3・4		日本語教育方法論 Ⅰ（前期） 日本語教育方法論 Ⅱ（後期）			
5・6					
7・8					
9・10					

日本語教育方法論Ⅰ 前期 三隅友子

- ・ 受講人数： 25名（留学生5名・アメリカ・中国・韓国）
- ・ 目標：

日本語教育の現状を知ること。特に国内の日本語教育の様子とその変化をさまざまな資料をもとに確認する。また授業運営に協同学習の技法を組み込み、体験学習を目指した。
- ・ 実施内容：

今期は、受講生の留学生5名（アメリカ1名、韓国1名、中国3名）に、学び手の視点から情報を多く提供してもらった。基本的にはペア及びグループでの活動を中心にクラス運営を行った。6月には外部講師の講演会を聞くことから日本語とコミュニケーションに関する考察を行い、7月には徳島県内で働くインドシア人介護士5名との交流会を通して、地域で日本語を必要とする人に直接インタビューする活動も行った。

回	内容
1	初回 受講生紹介・グループ作り
2	国内の日本語教育概要
3	外国人介護士 資料読解 新聞
4	外国人介護士 資料読解 調査報告
5	外国人介護士ビデオ①

6	外国人介護士ビデオ②
7	国内の日本語教育
8	マンガ①「話さぬ父親」
9	マンガ② 日本語を必要とする人
10	地域の日本語教育（尾崎・足立論文）
11	講演会 (iPhone エバンジェリス中山氏)
12	講演会振り返り・地域の日本語教育
13	ことばのひろば紹介・7/13 準備
14	インドネシア人介護士との交流会
15	試験と振り返り

日本語教育方法論Ⅱ後期

大石寧子

- ・ 受講人数： 9名（内4名留学生）
- ・ 目標：日本語教育の授業がいかに関係していかを開講前・開講中・終了時と大きく3つにわけ、全体像を掴ませる。
- ・ 実施内容：
 - i. 開講前：

レディネス調査、ニーズ調査を中心にグループに分かれ、各調査に関し、必要性、調査項目等ディスカッションしなら案を作成し評価しあう。シラバスリストも課を限ってだが作成する。
 - ii. 開講中：

導入・文法整理・練習・会話・タスク・宿題への流れを知り、それぞれどのような方法や手立てがあるか、グループで考え、タスク、宿題案も作成する。また日本語を教えると言うこと、運用力をつけるとは、についても考える。
 - iii. 終了時：

評価の種類と特徴、成績表、アンケート、フォローアップについて考える。

留学生が参加していたことで、随所で実際の学習情報が得られた。また秋期日本語研修コースが同時期に走っていたので、屋外学習を支援したり機会あるごとに触れられたのも日本語教育がどういうものかの実感を得る助けとなった。

日本語教育演習・日本語教材演習 前期 三隅友子

- ・ 受講人数： 15名（外国人留学生5名・中国、韓国、アメリカ）
- ・ 目標：
日本語学習がどのように進められ、教育という枠組みの中で教師がどのような働きかけができるのかを体験することを目標とした。その中でも本実習では次の三つに焦点をあてた。①日本語を学ぶ人たちの情報②日本語の教材に関する知識③学習者が日本語を習得していく課程
- ・ 実施内容：
4月に来日した日本語学習者2名（初級）に対して、受講生がグループを作って曜日ごとに日本語学習を支援するプロジェクトワークを実施した（吉備真備プロジェクト）。教材は「みんなの日本語（スリーエーネットワーク）Ⅰ・Ⅱ」「聴解タスク」「標準問題集」及び自主作成教材「ふたりの日本語」を使用。

本授業に関しては平成22年度全学FD大学教育カンファレンス in 徳島（2011年1月21日）にて「実習教育を協同学習の観点から捉え直すー日本語教育演習・日本語教育教材研究の実践から〜」のテーマで発表を行った。

全学日本語コース

1. コース概要

- ・ 未習から上級までの、日本語学習を希望する学生、研究者とその成人家族を対象とする。
- ・ 常三島・蔵本キャンパスで実施する。
- ・ 希望者には参加証書を発行する。

2. コーディネーター： 橋本 智

3. 実施概要

- ・ 開講クラス及び使用教材

A1・A2 「みんなの日本語初級Ⅰ」

B1・B2 「みんなの日本語初級Ⅱ」

C1・C2 「みんなの日本語中級Ⅰ」

- ・ 受講者数

受講者総数 139名（申し込み人数 145名）

<春期> 2010年5月10日～2010年7月16日

開講クラス	人数（申し込み人数）	
	常三島	蔵本
A1	常三島	蔵本
A2	10 (10)	6 (6)
B1	6 (7)	—
B2	16 (17)	7 (8)
C1	5 (5)	—
C2	—	—
小計	11 (11)	4 (4)
合計	65 (68)	

<秋期> 2010年10月25日～2011年2月7日

開講クラス	人数（申し込み人数）	
	常三島	蔵本
A1	8 (9)	8 (8)
A2	9 (9)	8 (8)
B1	—	—
B2	13 (13)	11 (13)
C1	5 (5)	—
C2	12 (12)	—
小計	47 (48)	27 (29)
合計	74 (77)	

4. 平成22年度春期 開講状況 2010年5月10日～2010年7月16日

- ・ 常三島キャンパス（教室：総合科学部1号館 国際センター教室1・2）

	月	火	水	木	金
8:45～	日本語 A1-2				日本語 A1-2
10:25～	日本語 C2				日本語 C2
12:50～	日本語 A1-1			日本語 A1-1 日本語 B1-2	
14:35～	日本語 B1-1 日本語 B1-2			日本語 B1-1	
16:20～	日本語 A2 日本語 B2				日本語 A2 日本語 B2

- 蔵本キャンパス（教室：蔵本会館 第2集会室）

	月	火	水	木	金
8:45～					
10:25～	日本語 B1		日本語 B1		
12:50～					日本語 A1
14:35～		日本語 C2			日本語 C2
16:20～		日本語 A1			

5. 平成 22 年度秋期 開講状況 2010 年 10 月 25 日～2011 年 2 月 7 日

- 常三島キャンパス（教室：総合科学部 1 号館 国際センター教室 1・2）

	月	火	水	木	金
8:45～					
10:25～					
12:50～	日本語 A1			日本語 A1	
14:35～	日本語 B2 日本語 C2	日本語 C1		日本語 B2 日本語 C1 日本語 C2	
16:20～	日本語 A2				日本語 A2

- 蔵本キャンパス（蔵本会館 第2集会室）

	月	火	水	木	金
8:45～	日本語 A1			日本語 A1	
10:25～	日本語 A2		日本語 A2		
12:50～	日本語 B2		日本語 B2		
14:35～					
16:20～					

アジア人財資金構想（アジア人財コース）

徳島大学は、経済産業省と文部科学省が平成19年度から推進しているアジア人財資金構想高度実践留学生事業に平成20年度より参加し、本プログラムの共通カリキュラムを軸に、参加学生の日本語力、専門性等を考慮し、徳島大学独自のカスタマイズ化を行い、授業を行っている。

参加学生、授業期間は以下のとおりである。

・ 参加者：

第2期生（平成21年度生）

	性別	国籍・出身地	所属	学年
①	M	中国	先端技術科学教育部	M2
②	M	中国	先端技術科学教育部	D3
③	F	中国	総合科学教育部	M2
④	M	中国	先端技術科学教育部	M2
⑤	M	中国	先端技術科学教育部	D3

・ 期間：

第2期生

前期	5月18日（月）～7月30日（金）	月・水	16:20～17:50
		金	14:35～16:05
後期	10月5日（月）～11月5日（金）	水	16:20～17:50
		金	14:35～16:05

学生派遣関連

1. 2010年度 留学相談事業概要

・ 相談件数

まずは、昨年度の留学相談状況と今年度（2009年4月～2010年2月現在）の結果を表1で比較してみることにする。

（表1：2009-2010年度 留学相談件数比較 件数）

		2009年度	2010年度	合計
性別	男性	29	53	82
	女性	49	136	185
合計		78	189	267

一般的に、男子学生よりも女子学生の方が海外留学を希望する傾向があることはよく知られているが、本学でも同様の傾向を確認することができる。そして、表1に示す相談件数を見る限り、実際に留学するかは別としても、留学希望に関してはかなりのポテンシャルがあると考えられるように思われる。

・ 学部別相談件数

上記の結果を学部・学年別に毎に集計してみたところ、全体的に見て、

- (1) 学部生からの相談が全体の約85%を占め、1・2年生だけでも全体の約60%となっている
- (2) 常三島地区の方が蔵本地区よりも相談件数が多く、全体の約72%を占めている
- (3) 学部毎に特徴的な傾向を見ることができる
 - ・ 総合科学部では学部学生に留学希望者が多い
 - ・ 工学部においては相談者の約半数以上が大学院生となっている
 - ・ 医歯薬学部では3年生以上の相談者は殆どいない

などの傾向を見出すことができた。海外留学・研修に関しては、各学部・学科で対応されている場合も多いことから、一概には言えないが、これらの学部間における差異は、学部－大学院および常三島－蔵本地区における在籍者数の違

いだけでなく、具体的留学プログラムの有無（例えば、ダブルディグリー制度や研究留学生派遣実績の有無）により生じてきたところが大きいと思われる。これについては、次項で述べる派遣実績と併せて考えてみるようにしたい。

相談内容

留学に関する相談内容をまとめたものが表2である。表2では、1回の相談で複数の内容を取り扱うので、年間相談件数よりも数値が多くなっている。

(表2：留学相談内容 件数)

内容	2009年度	2010年度	合計
留学計画に関する相談	67	132	199
交換留学に関する相談	25	95	120
奨学金に関する相談	40	80	120
短期海外語学研修に関する相談	45	58	103
語学学習に関する相談	8	48	56
具体的渡航手続きに関する相談	10	37	47
奨学金への具体的申請に関する相談	5	22	27

表2において最も目を引くのが、「留学計画に関する相談」および「交換留学に関する相談」の増加です。最近の傾向として、多くの学生が「留年をしない＆新卒で就職活動に臨む」ことを非常に重視しているようで、その意識が留学計画や交換留学に関する相談件数の増加として表れていると思われる。特に、交換留学に関しては、2010年2月から学生派遣を開始した「慶北大学 International Education Program」についての質問が多く寄せられるようになり、その結果、相談件数が格段に増えたと考えられる。

また、奨学金や短期語学研修に関する質問・相談も非常に多くなり、特に2010年度夏期から派遣を開始した「慶北大学 夏休み韓国文化体験プログラム」に関しては、本学から派遣する2名以内の学生の参加費を免除してもらっていることもあり、同プログラムに関する学生からの質問・相談が非常に増加した。

以上のことを総合的に考えれば、本学学生の海外留学に対する希望は高まってきており、奨学金、単位互換などに関する具体的な情報をパッケージとして提示出来れば、更に多くの学生を海外に派遣できるのではないかと考える。

2. 2010年度 学生派遣実績

派遣実数

2010年度に留学許可を得て海外に留学した学生数は52名にのぼるが、その内の約80%が常三島キャンパス（総合科学部、工学部）となっていた。

(表3：学部別派遣人数 人)

	総合科学部	工学部	医学部	合計
学部生	16	10	9	35
大学院生	0	16	1	17
合計	16	26	10	52
	30.8%	50.0%	19.2%	100.0%

部局別学生派遣状況を派遣プログラム別に見てみると表3のようになる。

(表4：プログラム別学生派遣状況 人)

	総合科学部	工学部	医学部	合計
交換留学	3	1	1	5
研究留学	0	2	0	2
サマリーサーチ留学*	0	0	4	4
ダブルディグリー留学**	0	1	0	1
グローバル大学院工学教育プログラム短期派遣**	0	14	0	14
短期海外研修	13	3	5	21
研究室派遣	0	5	0	5
合計	16	26	10	52

* 医学部生を対象とした短期海外専門研修プログラム

** 工学部に所属する大学院生を主に対象とした留学プログラム

まず、表3から伺えるように、2010年度の学生派遣で特徴的な点は「半数の学生が工学部からであること」を挙げることができる。その背景としては、表

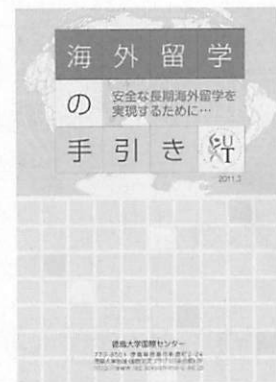
4 からもうかがえるように、工学部にはダブルディグリー留学やグローバル大学院工学教育プログラム短期派遣といった学部固有のプログラムがあり、専門教育および研究の一環として学生を海外に派遣できるようになっていることが大きく影響していると考えらる。

本学における海外留学希望者は増えてきており、その相談件数も非常に多くなってきている。これからは、奨学金や単位互換、専門教育・研究との連携をパッケージとして提示できるような留学プログラムが求められているのかもしれない。

3. その他

- ・ 「海外留学の手引き：安全な長期海外留学を実現するために」の作成

日本学生支援機構（JASSO）が提供する「留学生交流支援制度（長期派遣）」の予算を基に、海外留学の安全マニュアルを作成した。内容としては、（1）出国前の準備、（2）滞在中の注意事項、（3）国別緊急連絡電話番号一覧、などを含んだものとなっており、奨学金に関する情報だけでなく、海外留学での安全対策も含んだものとなっている。



- ・ 「長期海外留学のススメ」の作成

「留学生交流支援制度（長期派遣）」の予算を基に、同奨学金制度の紹介パンフレットを作成した。内容としては、（1）留学生交流支援制度の特徴、（2）同制度への申請について、（3）Q&A、（4）同制度による留学体験記を含んだものとなっており、今後も学内で留学相談などを展開していく際に積極的に活用したいと考えている。



指導・相談関連

相談業務

本学に在籍中の留学生だけではなく、留学生の家族、外国人研究者および学外の徳大入学希望者から相談を行っている。新蔵地区は常時相談できる体制であるが、蔵本地区には常時事務員一人と火曜日午後と金曜日午後に教員一人が加えて対応している。また、メールでの相談も対応している。

主な相談内容

- ・ 学習関係： 進学，指導教官との関係，就職など
- ・ 生活関係： 奨学金，アルバイト，居住，保証人など
- ・ その他： ビザ，交通事故，トラブル，人間関係など

留学生受け入れおよび支援に関する活動（2010年4月～2011年3月）

- ・ 4月 新入外国人留学生のためのガイダンス（常三島地区，蔵本地区）
- ・ 8月 日韓共同理工系学部留学生説明会 韓国（ソウル）
- ・ 10月 新入外国人留学生のためのガイダンス（常三島地区，蔵本地区）
- ・ 11月 多文化体験交流会の開催

随時 工学部，総合科学部へ入学希望者の学歴認定調査を実施

日韓共同理工系学部留学生担当業務

平成16年度には工学部生物工学科が1名、平成18年度には工学部電気電子工学科が1名を受け入れているが、日韓共同理工系学部留学生を増やすため、9月韓国ソウルで「日韓共同理工系学部留学生説明会」に参加。

同窓会との連携および支援

本学を卒業又は修了した元留学生や研究に従事した元外国人研究者らとの連携を強化するため、第2回卒業留学生同窓会を1月22日と23日に中国上海市と韓国釜山市でそれぞれ開催した。

卒業留学生同窓会との連携を強化するための事業として、卒業留学生同窓会からの推薦による優秀な留学生の教育費免除制度や奨学金給付制度、そしてインターネット出願制度、卒業留学生データベース、学長表彰制度などの支援策を立ち上げた。

国際シンポジウムの開催

第7回徳島大学国際展開推進シンポジウム「母国で振り返る私の徳島大学留学生時代」を国際連携推進室と共同開催した。本年度は中国出身の卒業留学生2名、韓国、マレーシア出身の卒業留学生各1名を招聘し講演を行った。

その他

徳島大学卒業留学生同窓会（中国・韓国）

第2回徳島大学卒業留学生同窓会を中国上海と韓国釜山で開催

徳島大学（香川 征学長）は、本学を卒業又は修了した元留学生や研究に従事した元外国人研究者らとの連携を強化するため、第2回卒業留学生同窓会を1月22日と23日に中国上海市と韓国釜山市でそれぞれ開催した。

このうち、2008年11月の設立総会以来、今回が2回目となった中国留学生同窓会には、中国出身の元卒業生や修了生、そして元外国人研究者など約30人が中国各地から集まったが、今回の中国同窓会には、韓国留学生同窓会会長にも出席をお願いし、この同窓会を中心とした日中韓による連携を、共同研究の分野などで相互に深めることとした。

また、総会に引き続き開催された交流会には、地元から中国に進出している徳島県や企業の関係者の方々に出席いただき、留学生同窓生らと徳島の留学時の思い出やお互いの近況などについて、いつまでも楽しく懇談することができた。



第2回徳島大学卒業留学生（中国）同窓会

また、翌23日には、第2回韓国留学生同窓会を韓国釜山市のホテルを会場に開催し、韓国全土から同窓会役員を中心として約10名以上の元留学生が家族とともに参加した。

が、引き続き開催された懇談会では、久しぶりに会った元留学生らが互いに旧交を温めるとともに、徳島大学での楽しかった留学時代について大学関係者とともに懐かしんでいた。



第2回徳島大学卒業留学生（韓国）同窓会

徳島大学からは、香川学長、五十嵐理事、福井国際センター長ら関係者が出席し、卒業留学生同窓会との連携を強化するための事業として、卒業留学生同窓会からの推薦による優秀な留学生の教育費免除制度や奨学金給付制度、そしてインターネット出願制度、卒業留学生データベース、学長表彰制度などを紹介した。

そして、卒業留学生らは、紹介のあった徳島大学の取組を高く評価するとともに、今後の連携強化に期待を寄せていたが、これを機会に、徳島大学では引き続き留学生同窓会との連携を強化し、優秀な留学生の獲得や国際共同研究を推進したいと考えている。

国際交流サロン

地域及び日本人学生との協働の場として例年5月から3月(実施は2月末)まで毎月土曜日に実施している。国際センターが行っていた公開講座「国際交流ボランティア入門—徳島に住む外国人を支援するとは」の修了生が中心となってできたボランティアグループの国際交流サロン JSS と国際センターとの連携もよく、運営は順調であったが、10月は台風接近のため実施を見合わせたことは残念であった。今後も日本語を使つての協働の場を更に充実させて行きたい。参加人数は、述べ382名で、留学生175名、日本人学生及び地域は212名であった。内容は以下のである。

	実施日	内 容	参加者数		
			日本人	留学生	合計
1	5月15日	日本語でしゃべらんで —お餅をついてみよう	27	18	45
2	6月12日	日本語でしゃべらんで —折り紙を折ってみよう	17	28	45
3	8月7日	日本語でしゃべらんで —浴衣を着て阿波踊りを踊ろう	25	15	40
4	9月25日	日本語でしゃべらんで —日本語で話して友達になろう	16	10	26
5	10月30日	日本語でしゃべらんで —書を楽しもう(台風接近のため中止)	—	—	—
6	11月27日	留学生の国への誘い —日本語による留学生のお国紹介	19	31	50
7	12月11日	日本語でしゃべらんで —茶道を楽しもう	11	22	33
8	1月22日	日本語でしゃべらんで —世界の料理を楽しもう	21	32	53
9	2月5日	日本語でしゃべらんで —着物の歴史を学んで、着てみよう	20	30	50
10	2月26日	日本語でしゃべらんで —ひな壇を飾ろう	19	26	45



浴衣を着て阿波踊りを踊ろう



世界の料理を楽しもう



着物の歴史を学んで、着てみよう



日本語による留学生のお国紹介



茶道を楽しもう



ひな壇を飾ろう

サポーター制度

国際センターには、日本語教育をはじめとする国際センター（以下センターとする）の活動を支援する徳島の住民からなる「地域サポーター」と徳島大学の日本人学生たちからなる「学生サポーター」の登録システムがあり、サポーターは徳島大学で行われている全ての日本語授業の要請にこたえ、会話練習・タスク・動詞変換練習等の相手、ひらがなをはじめとする表記の補講、プレゼンテーションの評価等いろいろな形でクラスに参加する。今年度の登録サポーター数は、地域サポーター54名、学生サポーター26名、計80名で、前年度を上回った。活動において本人の授業が本活動と重なる学生サポーターに比べて地域サポーターが多いのは前年と同様であるが、内容は日本語教育そのものから文化面までと活動の幅が広がった。本年度は、2月上旬までで17活動となり、延べ参加人数は地域78名、学生23名、計101名と大幅増員となった。

	実施月	内 容	サポーター参加者数
1	4月	常三島キャンパスツアー	学生サポーター 3名
2	5月	動詞変換練習	地域サポーター 3名 学生サポーター 1名
3	7月	スピーチ練習	地域サポーター 2名
4	7月	会話練習（常三島）	地域サポーター 7名 学生サポーター 2名
5	7月	会話練習（蔵本）	地域サポーター 6名
6	7月	キャッチコピー発表・評価	地域サポーター 6名 学生サポーター 2名
7	8月	スピーチ練習	地域サポーター 4名
8	8月	スピーチ練習	地域サポーター 5名
9	8月	春期日本語研修コース修了式	地域サポーター 15名
10	10月	常三島キャンパスツアー	学生サポーター 4名
11	11月	ひらがな補講	地域サポーター 3名
12	11月	日本語ビジネス文化研修旅行補助	学生サポーター 3名
13	11月	文化体験－書道	地域サポーター 5名 学生サポーター 1名

14	11月	クラスからの取り出し（補講）	地域サポーター 学生サポーター	4名 4名
15	2月	文化体験—華道	地域サポーター 学生サポーター	5名 1名
16	2月	スピーチ練習	地域サポーター	6名
17	2月	小論文作成のための発表についてコメント	地域サポーター 学生サポーター	7名 2名

2011年2月10日現在



地域貢献

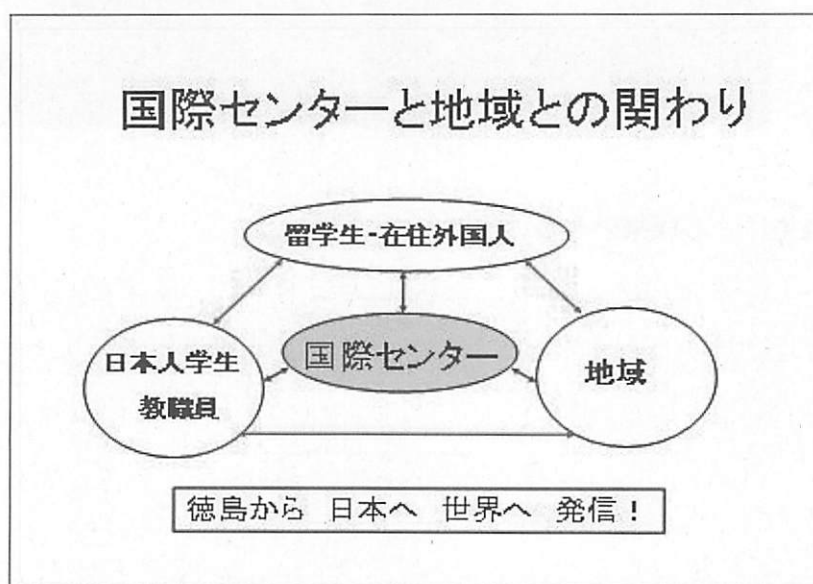
地域連携推進室及び地域創生センターとの協力によって、様々な地域の国際化を図る取り組みを行っている。

地域貢献（多文化交流・地域共生）事業のポイント

- 異なる文化を持った人を受け入れ、共生を目指す地域社会を創造する
～お互いの共生・協労への理解～
- 地域に住む住民としての外国人と日本人の関係を作る
～出会いの場と共存を考える活動の提供～
- 徳島という地域で独自の共生を住民で考える
～将来の共生の担い手に学習課題としての提示～

1. 事業の目的と経過

国際センターは、地域に根ざした異文化理解を進める取り組みを行っています。下図のようにセンターが中心となって①留学生・在住外国人②日本人学生と教職員、そして③地域、の人と人とを結ぶ様々な活動を計画・実施しています。現在まさに、少子・高齢化といった社会情勢に応じて、徳島県にも外国人労働者が急激に増加する可能性があります。その際、互いに地域住民として共生・協労への理解を図る地域社会（コミュニティ）作りが重要な問題となります。この視点からセンターでは従来の学内の<講座>「国際交流の扉を拓く」や「国際交流サロン」（月1回開催、留学生とともに日本文化を楽しむ）、そして学外への「異文化理解出張講座」（教育機関・公民館の依頼による）を進めて来ました。



2. 「多文化共生の社会をめざして～徳島を考えるシンポジウム」
(2011年2月4日に実施)

第一部：「外国人力士はなぜ日本語がうまいのか」の著書でも有名な早稲田大学の宮崎里司教授の講演「多文化共生社会における日本語教育の役割」の後、現在徳島で働くインドネシア人介護士5名と参加者との交流

第二部：徳島大学で学び現在東京で働くマレーシア人卒業生からは、自身の体験から日本で学び働くためのヒントを、さらに現在愛知県にて外国人労働者を受け入れる仕事に携わる卒業生からは、外国人と日本人の間に立って働く環境を作ることの意義を聞き、グループで話合う活動

最終的には「知り合おうーふれ合おうー認め合おう」（徳島県国際フレンドシップ憲章のことば）の次の段階で徳島に住む私たちができることは何かを共に考えました。



3. 事業実施による成果と今後の展開

今後も人と人の出会いと協力を考えた、徳島という地域を考えた、そして地域の活性化に結びつく国際交流、多文化共生活動を推進して参ります。

English Chat Room

今年で9年目となる English Chat Room (ECR) であるが、今年度は前年度の反省を基に、前期・後期共に週2回（火曜・木曜 午後6:00～7:30）で実施した。利用者の数も順調に増えてきており、今年度は合計900名の方にご利用頂いた。背景としては、

- ・ 昨年度から共通教育センターEnglish Support Room と連携しながら活動を展開しており、常時複数の教員や事務（国際課など）が参加するようになったことから、学生と教職員が英語で語り合う場として ECR が機能するようになった
- ・ 文理大学や社会人などの学外からの参加者が口コミで参加してくれるようになり、学外の人達とも繋がりを持てる場として ECR が機能するようになった

といった点が大きく影響していると考えられる。

	1月	2月	4月	5月	6月	7月	10月	11月	12月	総計
2008	59	8	50	89	89	74	89	87	62	607
前期			50	89	89	74				302
後期	59	8					89	87	62	305
2009	54		45	85	110	77	52	73	78	574
前期			45	85	110	77				317
後期	54						52	73	78	257
2010	103		28	104	128	98	157	172	110	900
前期			28	104	128	98				358
後期	103						157	172	110	542
総計	216	8	123	278	327	249	298	332	250	2081



教員出張（センター関連のみ）

三隅友子

- ・ とくしま県民活動プラザ 理事及び運営委員
- ・ 徳島県立近代美術館協議会委員
- ・ 徳島市立高校 異文化理解講座（6月及び1月）
- ・ 鳴門第一高校 アサーティブ講座（5月教員対象、12月2年生150名対象）
- ・ 鴨島東中学 人権に関する講演（5月全学対象）
- ・ 山川中学 人権に関する講演（12月全学対象）
- ・ 徳島県自治研修センター「国際化講座」 講義（7月）
- ・ 徳島県看護協会 コミュニケーション研修（12月）
- ・ 「徳島大学卒業留学生中国同窓会」上海出張

大石寧子

- ・ 日本語教育学会大会委員会第1～6回
- ・ 日本語教育学会評議員会第1～2回
- ・ 日系人就業準備研修事業に係る日本語教育専門委員会第1～2回
- ・ 日系人就業準備研修事業に係る日本語教育現場視察
- ・ アジア人財事業関連「研修事例検討会」、「研修会」、「授業視察」等
- ・ 財）日本国際協力センター関西支所「運用に繋げる日本語教育とは」講演
- ・ 脇町高校、城北高校「出張講座」講義
- ・ 世界日本語教育大会（於台湾国立政治大学）発表
- ・ 日本語研修コース研修旅行（海南小学校 他）引率
- ・ 日本ビジネス・文化研修旅行（大塚製薬板野工場、脇町）引率

金成梅

- ・ 国立大学留学生センター留学生指導担当研究協議会 東京大学
- ・ 「平成22年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会」新潟大学
- ・ 平成22年度外国人のための進学説明会（大阪会場）大阪
- ・ 「日韓共同理工系学部留学生説明会」韓国 ソウル
- ・ 大阪日本語教育センター主催の進学説明会 大阪
- ・ 第二回徳島大学卒業同窓会（中国）中国上海
- ・ 第二回徳島大学卒業同窓会（韓国）韓国釜山
- ・ 協定校訪問（韓国国立海洋大学、ソウル大学など）韓国（釜山、ソウル）

坂田浩

- ・ 留学生交流協議会 出席 (東京)
- ・ 伊方原子力発電見学 引率 (松山)
- ・ スキー研修 引率 (鳥取)

橋本智

- ・ サマースクール・プログラム日本文化体験 (京都、徳島) 学生引率
- ・ アジア人財資金構想・就職支援分科会 (大阪) 出席
- ・ 日本語研修コース助任小学校訪問 (徳島) 学生引率
- ・ 実地見学研修旅行 (三重、奈良) 学生引率
- ・ 徳島県立城東高校 出張講義

留学生在籍状況

徳島大学外国人留学生在籍状況（平成 23 年 2 月 1 日現在単位：人）

【国別】

区分／国又は地域名		学部学生			大学院生			研究生等			合計
		計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費	計
アジア	インドネシア				9	4	5	1	1	1	10
	台湾				1	1		1			2
	韓国	1	1		12	5	2	4	1	1	17
	中国	5	3		103	42	10	28	18		136
	バングラデシュ				14	4	6	1	1		15
	フィリピン				1	1		1	1	1	2
	ベトナム	4	2		8	4	4				12
	マレーシア	14	5		8	4	1	1			23
	モンゴル				17	9	2				17
	ラオス				1						1
北米	アメリカ	1	1								1
中南米	ドミニカ共和国				1	1	1				1
	ペルー							1	1	1	1
欧州	ドイツ				2		2	1			3
大洋州	ソロモン諸島							1		1	1
中東	クウェート							1		1	1
アフリカ	ウガンダ	1		1							1
	エジプト				19	7					19
	ギニア				1						1
	ケニア				1	1	1				1
合計 20 ヶ国		26	12	1	198	83	34	41	23	6	265

平成 23 年 2 月 1 日現在（単位：人）

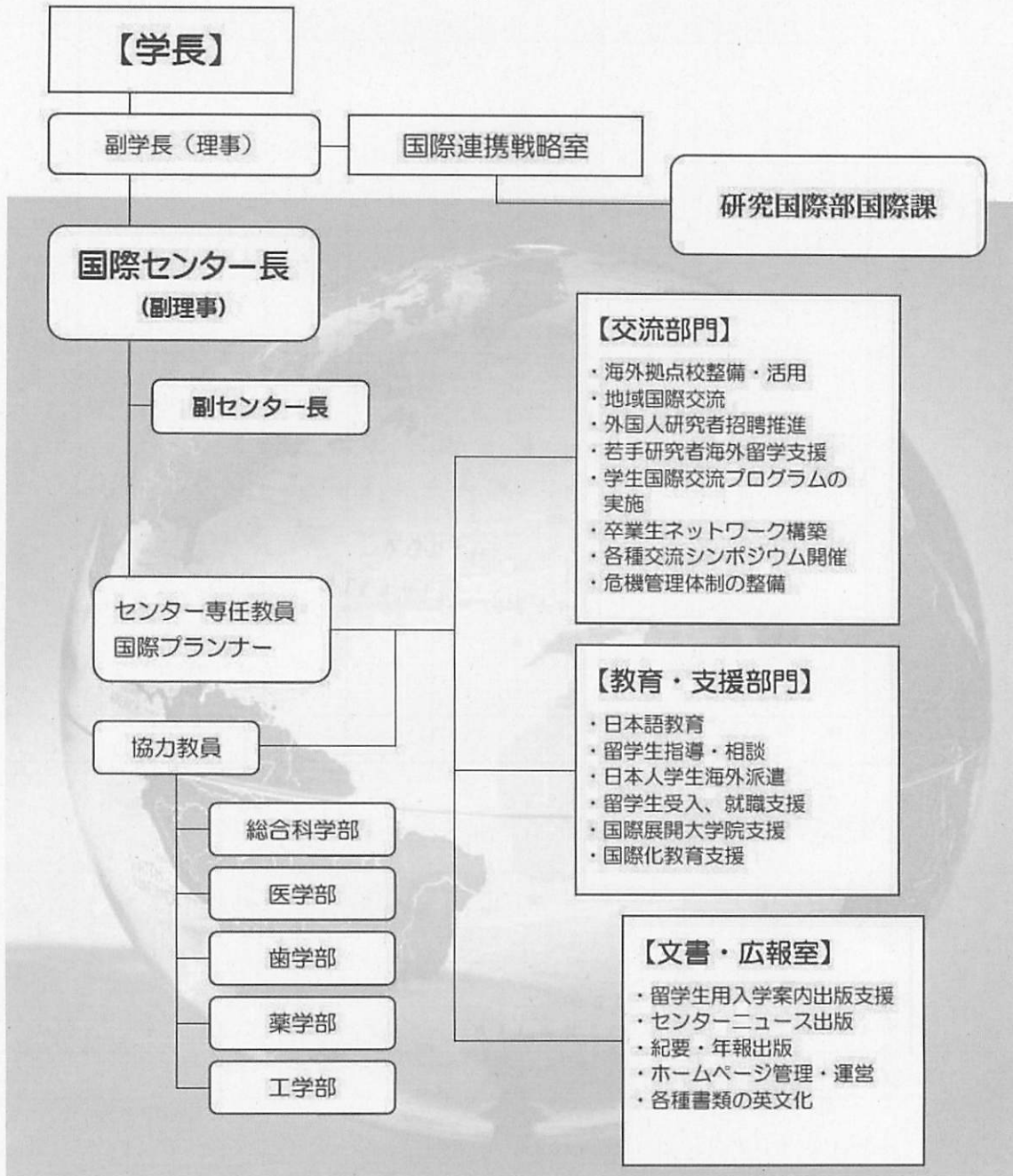
【所属別】（平成 23 年 2 月 1 日現在単位：人）

所属/区分	学部学生			大学院生			研究生等			合計
	計	女子	国費	計	女子	国費	計	女子	国費	計
総合科学部	2	2					20	13		22
医学部							2	2		2
歯学部							2	2	2	2
薬学部							3	2		3
工学部	24	10	1				9	1		33
総合科学教育部				15	11					15
医科学教育部				30	13	7				30
栄養生命科学教育部				9	6	4				9
保健科学教育部				1						1
口腔科学教育部				18	12	7				18
薬科学教育部				7	3	4				7
先端技術科学教育部				118	38	12				118
疾患酵素学研究センター							1	1		1
日本語研修生							4	2	4	4
合計	26	12	1	198	83	34	41	23	6	265

【徳島大学における過去 5 年間の留学生受入数】各年度 5 月 1 日現在（単位：人）

区分/年度	18 年度	19 年度	20 年度	21 年度	22 年度
国費	42	46	45	41	42
政府派遣	6	10	14	15	16
私費	184	196	200	202	204
計	232	252	259	258	262

国際センター組織図



国際センター規則

徳島大学国際センター規則

平成 14 年 3 月 27 日

規則第 1703 号制定

(趣旨)

第 1 条 この規則は、徳島大学学則第 4 条第 2 項の規定に基づき、徳島大学国際センター(以下「センター」という。)について必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第 2 条 センターは、徳島大学(以下「本学」という。)の学内共同教育研究施設として、本学の国際交流事業を一元的に管理し、地域との共同事業を提案し、地域及び世界に開かれた交流拠点となると共に、外国人留学生(以下「留学生」という。)及び海外留学を希望する本学の学生(以下「留学希望者」という。)に対し、必要な教育、指導及び助言等を行い、日本人学生と留学生との相互教育の場を提供することを目的とする。

(部門の設置)

第 3 条 前条の目的を達成するため、センターに「交流部門」及び「教育・支援部門」を設置し、各部門に長を置く。

(業務)

第 4 条 交流部門においては、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 学術交流協定校及び国際関係機関との連携
- (2) 研究者の受入、派遣事業への支援
- (3) 地域における国際交流活動の支援
- (4) その他第 2 条の目的を達成するために必要な国際交流関係業務

2 教育・支援部門においては、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 留学生に対する教育、指導、相談及び支援
- (2) 留学希望者に対する指導、相談及び支援
- (3) 地域における国際交流活動の支援
- (4) その他、第 2 条の目的を達成するために必要な教育業務

(職員)

第 5 条 センターに、次の職員を置く。

- (1) センター長
- (2) センター教員
- (3) その他必要な職員

(センター長)

第 6 条 センター長は、学長が指名する職員をもって充て、センターの業務を掌理する。

- 2 センター長の任期は、2年とし、再任されることができる。ただし、センター長が任期の途中で欠員となった場合の補欠のセンター長の任期は、前任者の残任期間とする。

(副センター長)

第7条 センターには、センター長を補佐するため、副センター長を置くことができる。

- 2 副センター長は、センター教員のうちから学長が任命する。
- 3 副センター長の任期は、2年とし、再任されることができる。ただし、再任は1回限りとする。
- 4 副センター長は、交流部門長又は教育・支援部門長を兼任する。

(協力教員)

第8条 センターに、センターの業務を円滑に実施するため、協力教員を置く。

- 2 協力教員は、原則として、各学部(学部(併任された大学院教員を構成員として含む。))から1名ずつ選出するものとし、各学部長からの推薦により学長が命ずる。
- 3 協力教員の任期は、2年とし、再任されることができる。
- 4 協力教員は、センターが行う業務において、協力教員が所属する学部(当該学部を基礎とする大学院教育部を含む。))との連絡調整を行う。

(教員選考)

第9条 センターの教員選考は、国立大学法人徳島大学教員選考基準により、第10条に定める運営委員会の議に基づき、学長が行う。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの管理運営に関する重要事項を審議するため、徳島大学国際センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

- 2 運営委員会について必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、研究国際部国際課において処理する。

(雑則)

第12条 この規則に定めるもののほか、センターについて必要な事項は、センター長が学長の承認を得て別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成14年4月1日から施行する。
- 2 徳島大学留学生支援センター規則(平成13年10月19日規則第1669号)は、廃止する。

附 則(平成16年3月19日規則第1867号改正)

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則(平成16年4月16日規則第74号改正)

この規則は、平成 16 年 5 月 1 日から施行する。

附 則(平成 17 年 3 月 24 日規則第 160 号改正)

1 この規則は、平成 17 年 3 月 26 日から施行する。

附 則(平成 18 年 3 月 31 日規則第 123 号改正)

この規則は、平成 18 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 19 年 3 月 16 日規則第 71 号改正)

1 この規則は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

2 徳島大学留学生センター長選考規則(規則第 1705 号)は廃止する。

附 則(平成 20 年 11 月 26 日規則第 27 号改正)

1 この規則は、平成 20 年 12 月 1 日から施行する。

2 この規則の施行日の前日において徳島大学留学生センターの副センター長であった者については、この規則の施行日以降も引き続き副センター長として任命するものとし、その任期は、第 7 条第 3 項の規定にかかわらず、平成 22 年 3 月 31 日までとする。

附 則(平成 21 年 3 月 31 日規則第 120 号改正)

この規則は、平成 21 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 22 年 4 月 1 日規則第 1 号改正)

この規則は、平成 22 年 4 月 1 日から施行する。

国際センター運営委員会規則

平成 14 年 3 月 27 日

規則第 1704 号制定

(趣旨)

第 1 条 この規則は、徳島大学国際センター規則第 10 条第 2 項の規定に基づき、徳島大学国際センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)について必要な事項を定めるものとする。

(所掌事項)

第 2 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 徳島大学国際センター(以下「センター」という。)の管理運営の基本方針に関すること。
 - (2) センターの予算概算の方針に関すること。
 - (3) その他センターの管理運営に関する重要事項
- 2 運営委員会は、前項各号に掲げる事項のほかセンターの教育、研究及び国際交流に関する重要事項及び徳島大学教授会通則(規則第 1456 号第 3 条)の規定により教授会の権限に属させられた事項を審議する。

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
 - (2) センターの教授及び准教授
 - (3) 各学部(学部)に併任された大学院教員を構成員として含む。)から選出された教授 各 1 人
 - (4) 疾患酵素学研究センター及び疾患ゲノム研究センターから選出された教授 各 1 人
 - (5) その他運営委員会が必要と認める者
- 2 前項第 3 号から第 5 号までの委員は、学長が命ずる。

(任期)

第 4 条 前条第 1 項第 3 号から第 5 号までの委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。
ただし、委員に欠員が生じたときの後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

- 2 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

(会議)

第6条 運営委員会は、委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(代理出席)

第7条 第3条第1項第3号及び第4号の委員が会議に出席できないときは、代理の者を出席させることができる。

(委員以外の者の出席)

第8条 運営委員会が必要と認めるときは、会議に委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことができる。

(教員選考委員会)

第9条 運営委員会は、教員を選考する場合、徳島大学国際センター教員選考委員会(以下「選考委員会」という。)を設ける。

2 選考委員会について必要な事項は、センター長が別に定める。

(専門委員会)

第10条 前条に定めるもののほか、運営委員会に、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

(庶務)

第11条 運営委員会の庶務は、研究国際部国際課において処理する。

(雑則)

第12条 この規則に定めるもののほか、運営委員会について必要な事項は、運営委員会が別に定める。

附 則

この規則は、平成14年4月1日から施行する。

附 則(平成14年12月20日規則第1734号改正)抄

1 この規則は、平成15年1月1日から施行する。

附 則(平成16年3月19日規則第1867号改正)

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

附 則(平成17年3月24日規則第160号改正)

1 この規則は、平成17年3月26日から施行する。

附 則(平成18年3月31日規則第123号改正)

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

附 則(平成18年3月16日規則第71号改正)

この規則は、平成 19 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 20 年 3 月 21 日規則第 89 号改正)

この規則は、平成 20 年 4 月 1 日から施行する。

附 則(平成 20 年 11 月 26 日規則第 28 号改正)

- 1 この規則は、平成 20 年 12 月 1 日から施行する。
- 2 この規則の施行日の前日において徳島大学留学生センター運営委員会委員であった者については、この規則の施行日以降も引き続き運営委員会委員として任命するものとし、その任期は、第 4 条の規定にかかわらず、平成 22 年 3 月 31 日までとする。

学術協定校一覧 (2011年2月16日現在)

大学間交流協定校名 (重点大学)			国名
1	哈爾濱工業大学	(国立)	中国
2	フロリダアトランティック大学	(公立)	アメリカ
3	武漢大学	(国立)	中国
4	慶北大学校	(国立)	韓国
5	テキサス大学ヒューストンヘルスサイエンスセンター	(公立)	アメリカ
大学間交流協定校名 (17 大学)			国名
6	オークランド大学	(国立)	ニュージーランド
7	哈爾濱医科大学	(公立)	中国
8	ガジャマダ大学	(国立)	インドネシア
9	南通大学	(国立)	中国
10	同濟大学	(国立)	中国
11	韓国海洋大学校	(国立)	韓国
12	吉林大学	(国立)	中国
13	西安交通大学	(国立)	中国
14	マレーシアサインズ大学	(国立)	マレーシア
15	モンゴル健康科学大学	(国立)	モンゴル
16	バーゼル大学	(国立)	スイス
17	北京郵電大学	(国立)	中国
18	ゴンダール大学	(国立)	エチオピア
19	四川大学	(国立)	中国
20	南京大学	(国立)	中国
21	ハノーバー医科大学	(国立)	ドイツ
22	モナシュ大学	(公立)	オーストラリア
部局間交流協定校 (23 大学)			国名
23	黒龍江省科学院	(公立)	中国
24	ソウル国立大学校薬学大学	(国立)	韓国
25	トゥールーズ工科大学	(国立)	フランス
26	朝鮮大学校歯科大学	(私立)	韓国
27	復旦大学国際交流学院	(国立)	中国
28	タフツ大学人間栄養学加齢研究センター	(私立)	アメリカ
29	ヴィスバーデン応用科学大学	(国立)	ドイツ

30	サンノゼ州立大学	(公立)	アメリカ
31	建陽大学校	(私立)	韓国
32	デューク大学	(私立)	アメリカ
33	パキスタン・イスラム共和カラチ大学 国際化学センター	(国立)	パキスタン・イスラム 共和国
34	ハントウアー大学	(私立)	インドネシア
35	大連理工大学ソフトウェア学院	(国立)	中国
36	大連理工大学研究生院	(国立)	中国
37	中国医科大学口腔医学院	(国立)	中国
38	東義大学校大学院	(私立)	韓国
39	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 エシエルマン薬学部	(公立)	アメリカ
40	コロラド大学ボルダー校	(公立)	アメリカ
41	南台科技大学	(私立)	台湾
42	大理学院	(公立)	中国
43	上海交通大学医学院附属第九人民医院 *	(国立)	中国
44	ヘルシンキメトロポリア応用科学大学 *	(国立)	フィンランド
45	ソウル国立大学校医学大学 *	(国立)	韓国

* 平成 22 年度に締結

国際センター人員名簿 (2011年2月1日現在)

国際センター長

福井 清 副理事、教授 (疾患酵素学研究センター)

国際センター教員

三隅 友子 教授・副センター長・教育支援部門長
 大石 寧子 教授
 金 成海 教授・交流部門長
 坂田 浩 准教授・広報室長
 橋本 智 准教授
 竹内光恵 国際プランナー

国際センター運営委員会委員

桂 修治 教授 (総合科学部)
 中屋 豊 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)
 羽地 達次 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)
 福井 裕行 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部)
 西尾 芳文 教授 (大学院ソシオテクノサイエンス研究部)
 福井 清 教授 (疾患酵素学研究センター)
 片桐 豊雅 教授 (疾患ゲノム研究センター)

協力教員

田中 智行 准教授 (大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)
 山西 倫太郎 准教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 (医学系))
 三好 圭子 講師 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 (歯学系))
 福井裕行 教授 (大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 (薬学系))
 村上理一 教授 (大学院ソシオテクノサイエンス研究部)

国際課職員

課長	岡崎 房述
課長補佐：併任係長	内海 剛
係長	藤川 王男
主任	山口 百合
係員	有賀 なぎさ
係員	古城 浩子
係員	川人 公美
事務補佐員	宮城 千穂
事務補佐員	吉成 記子
事務補佐員	山本 裕子
事務補佐員	藤村 悦子
事務補佐員	米田 典代
事務補佐員	佐藤 浩子
アジア人財 事務	鶴田 典子

徳島大学国際センター 紀要第6号 年報第7号

編集発行： 徳島大学国際センター
徳島県徳島市新蔵町2丁目24
徳島大学地域・国際交流プラザ（日亜会館）2階
088-656-7082
<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp>
発行日： 2011年3月31日